

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

古 町

—館ノ内居館跡—

—中世仁科氏居館跡周辺の調査—

1991

大町市教育委員会

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

古 町

—館ノ内居館跡—

—中世仁科氏居館跡周辺の調査—

1991

大町市教育委員会



遺跡全景



輸入陶磁器（青白磁・青磁）



輸入陶磁器（龍泉窯系青磁）



輸入陶磁器（龍泉窯系青磁）

序

今回ここに報告する古町遺跡の発掘調査は、社館ノ内の水田農業確立小規模廃水対策特別事業に先立って、平成1年の晚秋～初冬にかけておこなわれたものであります。当地区の考古学的価値を理解される方々の多大なご尽力によって開始され、ここに報告書をまとめあげることができました。

この調査は短期間、小範囲ではありましたが、歴史的に極めて意義深い調査結果を得ることができました。そのひとつが、大町における名主といわれた仁科氏の館の一部と思われる遺跡が、この地で発見された意義は多大な成果であります。そして同時に私達大町市の歴史に貴重なる1ページを加えることができたといえます。

調査に関しては、この仕事に直接あたってくださった調査団長や先生方、さらに熱心に作業に身を投じてくださった作業員のみなさんの多大な御尽力によって当初の目的に達することができました。

この調査に当たり、調査団員の方々、作業員のみなさん、地主及び地元関係各位の多大な御尽力によって、このような成果を得られたことに重ねて感謝を申しあげ、ここに深甚なる敬意を表する次第であります。

平成3年3月

大町市教育委員会

教育長 矢口 格

例　　言

1. 本書は、平成1・2年度に大町市土地改良区理事長と大町市教育長との契約に基づいて行なわれた、水田農業確立小規模廃水対策特別事業（社館ノ内地区）に伴う、緊急発掘調査「古町遺跡・館ノ内居館跡」の報告書（概報）である。
2. 調査にあたっては、大町市教育委員会が組織した大町市埋蔵文化財調査団により実施された。
3. 調査結果については、基本的事項の統一はできる限り図ったが、表現方法等に多少の相違のある点は了解されたい。また、時間的制約等により遺物等すべて提示できず、図版中心の報告書となってしまったことを了解されたい。
4. 現場測量・整理作業と原稿執筆は関係者の協議により決定した。
 - 遺構測量は、荒沢進・島田哲男・清水隆寿・新井和男・白井潤・横沢和子・北沢和子・牛越真由美が行った。
 - 遺跡の地形・地質等については、森義直が行った。
 - 遺物整理作業は、島田・清水・白井・横沢・北沢・牛越・金原たか子・中条美幸・小日向美香・富田みづ子・大和芳子が行い、遺物実測は島田・清水・山岸洋一・木村隆一が行った。
 - 原稿執筆については、第Ⅰ章が事務局で、第Ⅱ章第1節が森義直、第Ⅳ章が藤崎健一郎の他は島田が行った。
 - 中世土師器・陶磁器については、動長野県埋蔵文化財センターの市川隆之氏・原明芳氏に御教示いただいたので記して感謝したい。
 - 遺構写真撮影は島田が主に、清水・白井が一部行い、遺物写真撮影は白井が主に行った。
5. 方位は都市計画図（1：2,500）から求めた座標北を使用している。
6. 本書の編集は、全員協議のもと事務局で行ない、藤崎健一郎が総括した。
7. 本書関係の実測図・記録写真・遺物等は大町市教育委員会が保管している。なお、関係資料については、社館ノ内古町遺跡を記号化し「YTH」と注記した。

目 次

巻頭図版 1・2

序

例 言

第Ⅰ章 調査の経過.....	1
第1節 経過概要.....	1
第2節 調査体制.....	1
第3節 調査日誌.....	2
第4節 調査方法.....	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境.....	8
第1節 立地と地形.....	8
第2節 周辺遺跡と古町遺跡の過去の調査.....	11
第Ⅲ章 遺構と遺物.....	18
第1節 平安時代の遺構と遺物.....	18
第2節 古代末～中世の遺構と遺物.....	28
第3節 まとめ.....	57
第Ⅳ章 結 語.....	62
写真 1～32	

図 目 次

第Ⅰ章

図 1 古町遺跡付近埋場整備事業実施計画図.....	4
図 2 古町遺跡、館ノ内居館跡発掘区割図 (1:2500)	5
図 3 館ノ内居館、古町遺跡位置小字図 (1:2500)	7

第Ⅱ章

図 4 古町遺跡土層柱状図・堺確認トレンチ1土層図.....	9
図 5 社地区北部周辺の遺跡 (1:20000)	10
図 6 1号住居跡(上・平面図1:60、下・カマド1:30)	12
図 7 1号住居跡出土遺物 (1:4) 遺物出土状況図 (1:40)	13
図 8 2号住居跡(上・平面図1:60、下・カマド1:30)	14
図 9 2号住居跡出土遺物実測図(1) (1:4、50は1:2)	15
図 10 2号住居跡出土遺物実測図(2) (1:4)	16
図 11 館ノ内居館跡、古町遺跡概出遺物 (1:4)	17

第 III 章

図 12	古町遺跡全体図 (1:200)	19
図 13	3号住居跡、礫、遺物出土状況 (1:60)・カマド (1:30)	23
図 14	3号住居跡 (1:60)	21
図 15	4号、5号住居跡 (1:60)	24
図 16	6号、7号、8号住居跡 (1:60)	25
図 17	平安時代土器実測図(1) (1:4)	26
図 18	平安時代土器・鉄製品実測図(2) (1:4)	27
図 19	建物跡群 (ピット群) 平面図 1 (1:80)	29
図 20	建物跡群 (ピット群) 平面図 2 (1:80)	31
図 21	建物跡群 (ピット群) 平面図 3 (1:80)	33
図 22	建物跡群 (ピット群) 平面図 4 (1:80)	35
図 23	建物跡群 (ピット群) 平面図 5 (1:80)	37
図 24	ピット群及び焼土 1~3 (1:30)	38
図 25	ピット群 (1:60)・P197 (鍛冶関係土坑)・配石 (1:30)	39
図 26	A地区中世遺物分布図(1) (1:600)	40
図 27	A地区中世遺物分布図(2) (1:600)	41
図 28	中世土器実測図 (1:4)	49
図 29	中世土器・国産陶器実測図 (1:4)	50
図 30	中世国産陶器・輸入陶磁器実測図 (1:4)	51
図 31	中世輸入陶磁器実測図 (1:4)	52
図 32	古町遺跡出土中世土師器器高、口径、底径相関図	52
図 33	砥石 (1~9)、研磨礫 (10~11)、磨石(3) (1~7、1:3・8~12、1:2)	53
図 34	石臼、石柱実測図 (1:6)	54
図 35	鉄、青銅製品 (1~21・1:2) 錢 (22~29・1:1)	54
図 36	建物跡群 (ピット群) の建物想定図	55
図 37	五十畳遺跡77号住居跡出土土器陶磁器	58
図 38	来見原 5号住居跡出土土器、陶磁器 (1:4)	58
図 39	五十畳遺跡72号住居跡出土土器、陶磁器	59
図 40	間田山寺廃寺乙地区出土遺物 (1. 青白磁・2~4. 古瀬戸・5~7. 土師器・ 8. 東海系陶器皿、5・6は2内出土・7は3内出土) (1~5、1:3、6~8、1:4)	60
図 41	館ノ内中城原遺跡道端地籍 7号土壤出土中世一括遺物 (1は龍泉窯系青磁・他は土師器)	61
図 42	山寺廃寺、中城原遺跡出土中世土師器・器高:口径相関図	61

写真目次

卷頭図版 1 造跡全景・輸入陶磁器（青白磁・青磁）

卷頭図版 2 輸入陶磁器（龍泉窯系青磁）

写真 1 1. 遠景（北東より・調査前） 2. 近景（東より・調査前） 3. 近景（南東より・調査中）

写真 2 1. 遠景（東より・調査中） 2. 全景（上空より）（右上は館ノ内居館跡一ノ郭・中央右端三ノ郭）

写真 3 全景（東側上空より）

写真 4 A区全景（やや東側上空より）

写真 5 1. 3号住居跡 磁・遺物（南より）出土状況 2. 3号住居跡 磁・遺物出土状況（東より） 3. 3号住居跡 東壁石積み

写真 6 1. 3号住居跡 磁・遺物出土状況（北より） 2. 3号住居跡 磁・遺物出土状況（西より） 3. 3号住居跡 西壁石積み

写真 7 1. 3号住居跡 全景（南より） 2. 3号住居跡 全景（東より） 3. 3号住居跡 北壁石積み

写真 8 1. 3号住居跡 全景（北より） 2. 3号住居跡 全景（西より） 3. 3号住居跡 南壁石積み

写真 9 1. 3号住居跡 磁出土状況（南より） 2. 3号住居跡 磁出土状況（東より） 3. 3号住居跡 カマド周辺 磁・遺物出土状況 4. 3号住居跡 カマド北東側 土器出土状態

写真 10 1~8. 3号住居跡カマド 1. 全景 2. 残存状態 3. 遺物出土状態 4. 正面より 5. 左側より 6. 右側より 7~8. 上部石組み除去後 燃焼部の敷石及び支脚石

写真 11 1. 4号住居跡 磁・遺物出土状況（南より） 2. 4号住居跡 カマド精査後 全景（南より） 3. 4号住居跡 カマド（正面） 4. 4号住居跡 カマド（左側より）

写真 12 1. 5号住居跡全景（西より） 2. 5号住居跡カマド 3. 5号住居跡カマド内 遺物出土状態 4. 6~7号住居跡（東より 手前は8号住居跡）

写真 13 1. 6号住居跡（西より） 2. 7号住居跡（東より） 3. 7号住居跡（南より）

写真 14 1. 中世建物跡群（ピット群）全景（上空より） 2. 中世建物群（ピット群）全景（東より）

写真 15 1. 建物跡群（ピット群）全景（西より） 2. 建物跡群のピット群（G-H-5グリッドより南側を望む） 3. P-5内磁石（北より） 4. P-13内磁石（東より）

写真 16 1. 建物跡群のピット群（K-9-10グリッドより西側を望む） 2. 建物跡群のピット群（J-6-7グリッドより西側を望む） 3. 建物跡群のピット群（F-6-7グリッドより東側を望む）

写真 17 1. 建物跡群のピット群（F-7グリッドより南東側を望む） 2. 建物跡群のピット群（F-

- 7グリットより南側を望む) 3. P. 33中世土器出土状態 4. P. 125炭化米塊出土
状態 5. P. 157石臼出土状態
- 写真 18 1. 建物跡群のピット群(E・F-7グリットより南側を望む) 2. 建物跡群のピット群(D-
7グリットより南側を望む) 3. 建物跡群のピット群(A・B-9・10グリットより東側を望
む)
- 写真 19 1. 建物跡群のピット群(B・C-9・10グリットより東側を望む) 2. 建物群のピット群
(B-14グリットより東側を望む) 3. P. 111~113(西より) 4. P. 121~125(北
より)
- 写真 20 1. 建物跡群のピット群(D・E-13・14グリットより北側を望む) 2. 建物跡群のピット
群(E・F-13グリットより北西側を望む) 3. 建物跡群のピット群(H-12グリットより北
側を望む)
- 写真 21 1. P. 197(鍛冶関係土坑)検出状況(北より) 2. P. 197(鍛冶関係土坑)検出状況
3. P. 197(鍛冶関係土坑)主体部断面(南より)
- 写真 22 1. P. 197(鍛冶関係土坑)全景(北より) 2. P. 197(鍛冶関係土坑)主体部全景(東
より) 3. P. 197(鍛冶関係土坑)主体部内鉄鋤等出土状況
- 写真 23 1~4. 配石 1.(東より) 2.(西より) 3. 石柱出土状態 4.(北より)
5. 居館跡北側外堀確認グリット1断面(北より)
- 写真 24 1. 2号住居跡調査地遠景(東より) 2. 2号住居跡調査地近景(西より) 3. 2号
住居跡調査地遠景(北東より 1989年調査B区より)
- 写真 25 1. 1号住居跡全景(南より) 2~4. 1号住居跡カマド 5~6. 1号住居跡遺物出
土状態
- 写真 26 1. 2号住居跡全景(西より) 2~4. 2号住居跡カマド 5~6. 2号住居跡遺物出
土状態 7. 2号住居跡西側外のピット(南より)
- 写真 27 平安時代土器
- 写真 28 平安時代土器、中世土器(土師器・内耳鍋)
- 写真 29 国産陶器 1. 山茶碗 2~4. 東海系捏鉢 3. 須恵質擂鉢 5. 腰折皿(15世纪
末) 擾鉢 濑戸系皿(16世纪) 6. 卸し目皿(13世纪后半・14世纪) 折縁深皿(14世纪
末)
- 写真 30 输入陶磁器 1. 白磁(古代末)碗・皿 2. 青白磁 同安窯系青磁 3. 白磁(中世)
龍泉窯系青磁碗 4~6. 鎌蓮弁文の龍泉窯系青磁
- 写真 31 砕石・研磨礫(基石状石器) 鉄製品 青銅製品
- 写真 32 1. 重機による表土除去作業 2. 検出作業 3~4. 遺構検出掘り下げ作業 5.
6. 遺構精査 実測作業 7. 現地説明会 8. ヘリコプターによる写真測図

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 経過概要

1. 調査の経過

昭和63年11月、大町市大字社館の内地区において、農業水田確立小規模排水対策特別事業による堤整備が実施される計画が持ち上がったことから、大町市教育委員会では、同年12月2日、大町市耕地林務課と、計画地内にある古町遺跡及び館の内居館跡の保護について協議を持ち、平成元年・2年の両年度に、市教委が主体となって発掘調査を実施することを確認した。工程配分は、平成元年度に発掘及び整理作業を、平成2年度に整理及び報告書作成作業を実施することとした。

市教委は、平成元年度事業分の文化庁の国庫補助内示を平成元年5月25日に受け取り（4月3日付け）、7月17日に大町市土地改良区と委託契約を結んで調査準備を始めた。発掘作業は10月16日に着手し、12月4日に終了した。この間、雨天等による中止を除くと27日間の発掘作業を実施している。古町遺跡では、I区1,500m²、II区1,800m²を全面発掘したが、館の内居館跡については、堤を確認するためにトレッチを入れるに止めた。

発掘作業終了後は、事務室において整理及び報告書作成作業を進め、本報告に至った。

なお、平成2年度事業分の国庫補助内示は平成2年5月28日に受け取り（4月4日付け）、委託契約は8月30日に交わしている。

第2節 調査体制

1. 調査体制

(1) 大町市教育委員会（文化財担当）

ア. 平成元年度

教育長 矢口 格／ 社会教育課長 降幡 忠／ 文化財係長兼課長補佐 降幡正光
 同係主事 新井和男・島田哲男／ 同係嘱託職員 白井 潤
 同係臨時職員 大和芳子・清水隆寿・横沢和子

イ. 平成2年度

教育長 矢口 格／ 社会教育課長 降幡 忠／ 文化財係長兼課長補佐 降幡正光
 同係主事 新井和男・島田哲男／ 同係主事補 清水隆寿／ 同係嘱託職員 白井 潤
 同係臨時職員 金原隆子・中條幸美・富田みつ子

(2) 大町市埋蔵文化財調査団（市教委が組織）

ア. 平成元年度

団長 篠崎健一郎／ 副団長 原田 鮎／ 調査主任 島田哲男
 調査員 荒井和比古・荒沢 進・白井 潤・清水隆寿・関 賢司・幅 具義・森 義直

調査補助員 伊藤真治

イ. 平成2年度

団長 篠崎健一郎／副団長 原田 晃／調査主任 島田哲男

調査員 荒井和比古・荒沢 進・臼井 潤・清水隆寿・関 賢司・幅 具義・森 義直

(3) 作業員

ア. 平成元年度（発掘作業）

青木富士太・飯島権幸・稻沢光子・薄井志げ子・遠藤充吉・上條光則・北沢栄子・北沢 茂・

下川悦治・竹村利忠・服部力夫・原山昭信・降旗 章・降旗くに子・降旗芳人・峯村道雄・横沢力門

イ. 平成2年度（整理作業）

北沢和子

2. 調査協力者

調査にあたり、多くの方々からご指導・ご協力を賜りました。以下、ご芳名を記し、御礼に替えさせていただきます（敬称略）。

(1) 指導者・協力者

樋口昇一／武藤雄六／市川隆之／原明芳／百瀬長秀／石上周藏／市村勝巳／野村一寿／神沢昌二郎／直井雅尚／竹原学／山田真一／山下泰永／小林康男／笹沢浩／小林秀夫／森島稔／土屋積／矢口忠良／会田進／青沼博之／桐原健／百瀬新治／岩田隆／鶴柄俊夫／矢島宏雄／山岸洋一／山田瑞穂／大沢哲／小池孝／宮城孝之／三好博喜／飯塚誠／高橋龍三郎／木村隆一

(2) 地権者

伊藤久義・原 武美・中島登美雄・中島弥志広

第3節 調査日誌（発掘作業のみ）

10月16日(月) 曇	重機による表土除去。	11月11日(土) 曇時々晴	3～5住掘り下げ。6住検出。柱穴
10月18日(水) 曇	重機による表土除去。	検出。	
10月19日(木) 曇	畚のち晴 重機による表土除去。	11月12日(月) 曙時々曇	休み。
10月31日(火) 曇	時晴 残土除去。道標検出。	11月13日(月) 曙時雨	3～5住掘り下げ。6住と重複して
11月1日(水)	畚のち晴 残土除去。道標検出。	7～8住検出。柱穴検出。	
11月2日(木)	畚のち晴 残土除去。道標検出。3軒の住跡跡を検出。住居番号は、以前に1・2号が検出されているので、3号から付けることとした。	11月14日(火) 曙	3～5住掘り下げ。柱穴検出。
11月3日(金)	晴 休み。	11月15日(水)	柱穴検出。
11月4日(土)	晴 休み。	11月16日(木)	柱穴検出。
11月5日(日)	晴 休み。	11月17日(金)	柱穴検出。
11月6日(月)	曇時晴 清水氏居館跡の空洞準備のため休みとする。	11月18日(土) 曙時々曇	休み。
11月7日(火)	清水氏居館跡の空洞準備のため休みとする。	11月19日(日) 曙のち曇	休み。
11月8日(水)	清水氏居館跡の空洞準備のため休みとする。	11月20日(月) 曙時々晴	3～5住精査。柱穴検出、掘り下げ。6住精査。
11月9日(木)	畚のち晴 道標検出。3～5住掘り下げ。午後開より作業中止。	11月21日(火) 曙時々曇	柱穴検出、掘り下げ。6住精査、実測。7住掘り下げ。
11月10日(金)	曇 道標検出。3～5住掘り下げ。	11月22日(水) 曙時々晴	柱穴掘り下げ、精査。3住精査。7住掘り下げ。
		11月23日(木) 曙	休み。

11月24日(金)	昼時々晴	柱穴検出、枠立。7住精査、実測。	11月30日(木)	昼一時晴	3~5住床面・カマド精査。
11月25日(土)	昼時々晴	柱穴検出、枠立。8住掘り下げ。	12月1日(金)	昼一時晴	3住精査及びカマド実測。柱穴群等真撮影。
11月26日(日)	昼一時晴	休み。	12月2日(土)	昼一時晴	機材のほどんどを片付け古城遺跡へ運搬。3住カマド実測及び石垣見遣し図作成。
11月27日(月)	昼一時晴	柱穴精査。明日の空間に備えて各遺構の精査、清掃。	12月3日(日)	昼時々晴	午前現地説明会(約30名参加)。3住石垣見遣し図・カマド新面図作成。
11月28日(火)	曇のち雨	午前空調準備(各遺構精査、清掃、ライン引き)及び空調。午後雨により作業中止。	12月4日(月)	昼一時晴	3住カマド精査、実測。3住石垣実測。残りの機材片付け。本日で作業終了。
11月29日(水)	昼一時晴	3~5住内の壁を取り外し新面図作成。3住石垣見遣し図作成。			

第4節 調査方法

今回の調査地は、古町遺跡の北東部と館ノ内居館の北堀と推定される部分の接する位置にある。

1988年12月に試掘調査を行ない、遺構・遺物の検出があったため、今回の調査範囲を決定した。

調査区は、任意に北西部の宅地に囲まれた部分をA区、居館跡に近い部分をB区とした。A区東側、B区北側、堀と推定される部分はトレンチを掘り範囲を確認した。表土除去作業は重機を用いて除去し、その後の検出作業は人力でおこなった。その結果、A区東側、B区北側に掘ったトレンチには遺構の検出がなく、遺物も少量であり、A区側から東へ、B区側から北へ傾斜をもっている浅谷状の地形となっているらしいことが確認されたのみであったので廃土置き場とした。B区では、遺構の確認もなく、A区を中心とした調査とした。堀確認のトレンチにおいては、はっきりと堀といえる遺構はなかった。中世と思われる黒色の凹面が認められたが、おそらくは自然地形を利用した堀の遺構か、もしくはこの南隣の遺跡下に堀がある可能性も考えられた。このためトレンチ調査のみにとどめた。またB地及び、堀トレンチの1.5m~2m下層からは弥生時代中~後期の土器片を包含する土層が検出されたが、開発工事においては破壊される可能性がないことから確認のみにとどめた。

A区においては、遺構面がほぼ全面に認められることから、出土遺物は、番号を付けて取り上げ、後にグリットが組めた時点においてグリットに降り分けた。

遺跡記号は、社館ノ内古町遺跡から略号化し、「YTH」とした。土杭(堀)・柱穴についてはすべてピットとし、P番号を付した。

測量は、座標方眼を設定し使用した。座標は、1988年度に実施した中城原遺跡の測量成果を基に御山光測査室に委託して求めた基準点、T-1 (X=+54089、608, Y=-56365、027、標高717.713m)、T-2 (X=+54085、299, Y=-56416、392、標高716.088m)、T-3 (X=+54141、406, Y=-5655、499、標高716.561m)、T-4 (X=+54173、591, Y=-56409、354、標高715.551m)を設置し、使用した。

測量作業はT-1~T-4より求めた点の杭に基いた簡易造り方測量と、衛写真測定研究所に委託したヘリコプターによる写真測定図を併用し進めた。

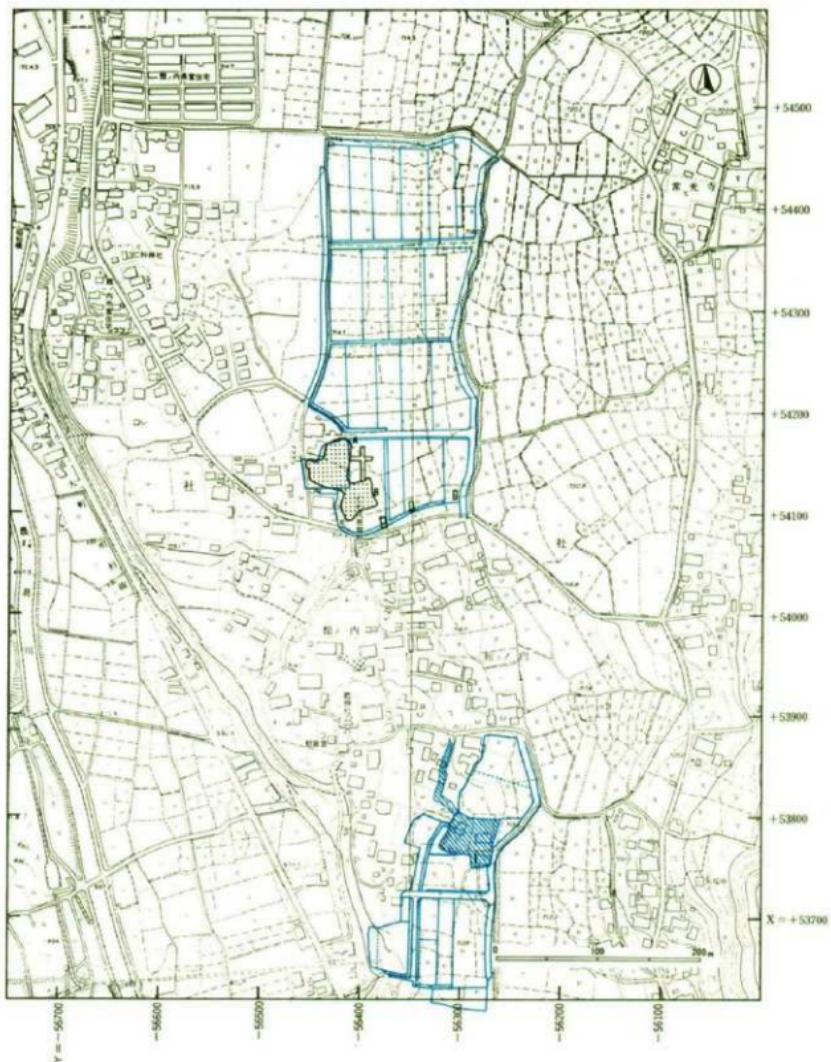


図1 古町道路付近は場整備事業実行計画図

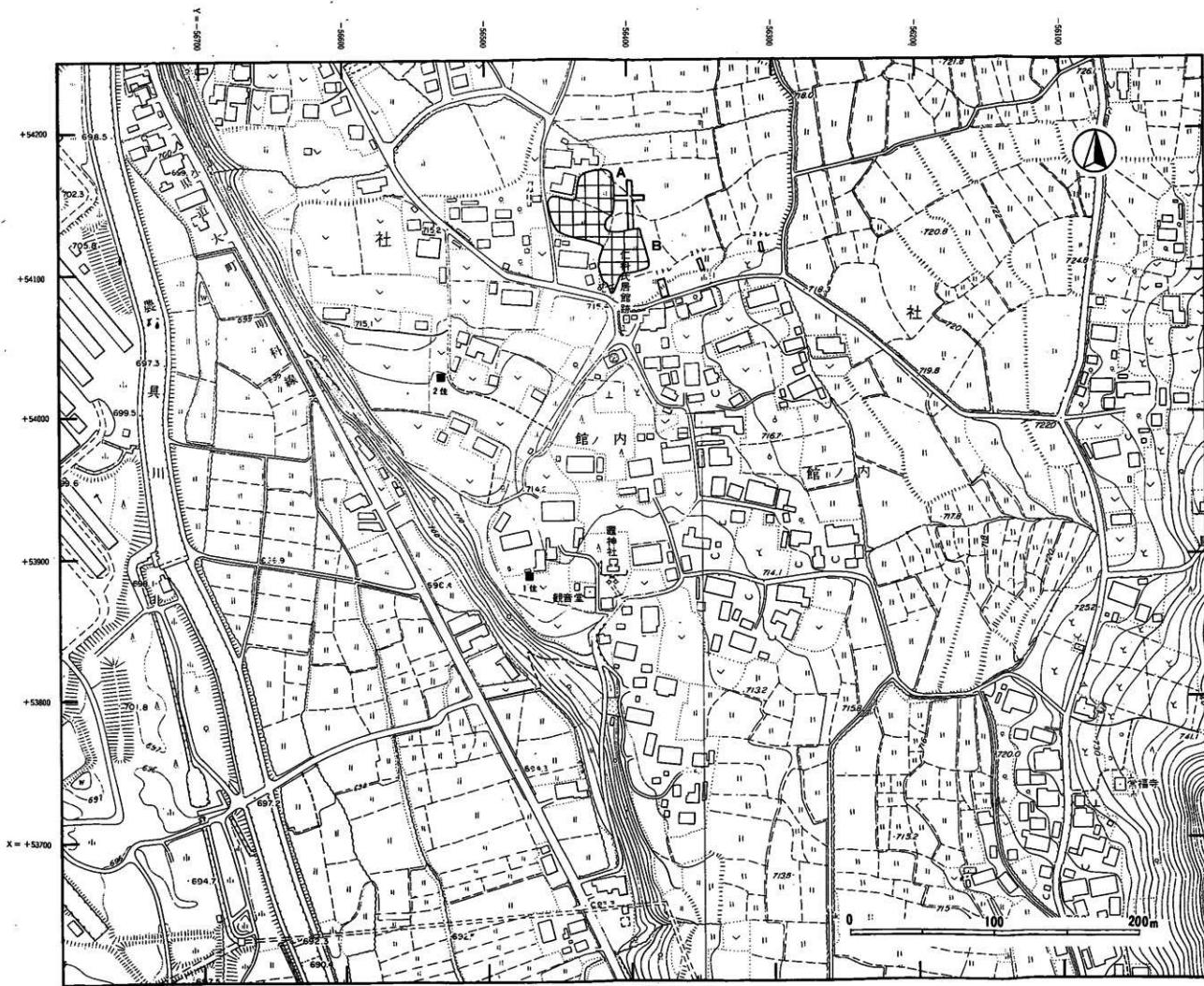


図2 古町遺跡、館ノ内居跡発掘区割図 (1:2500)

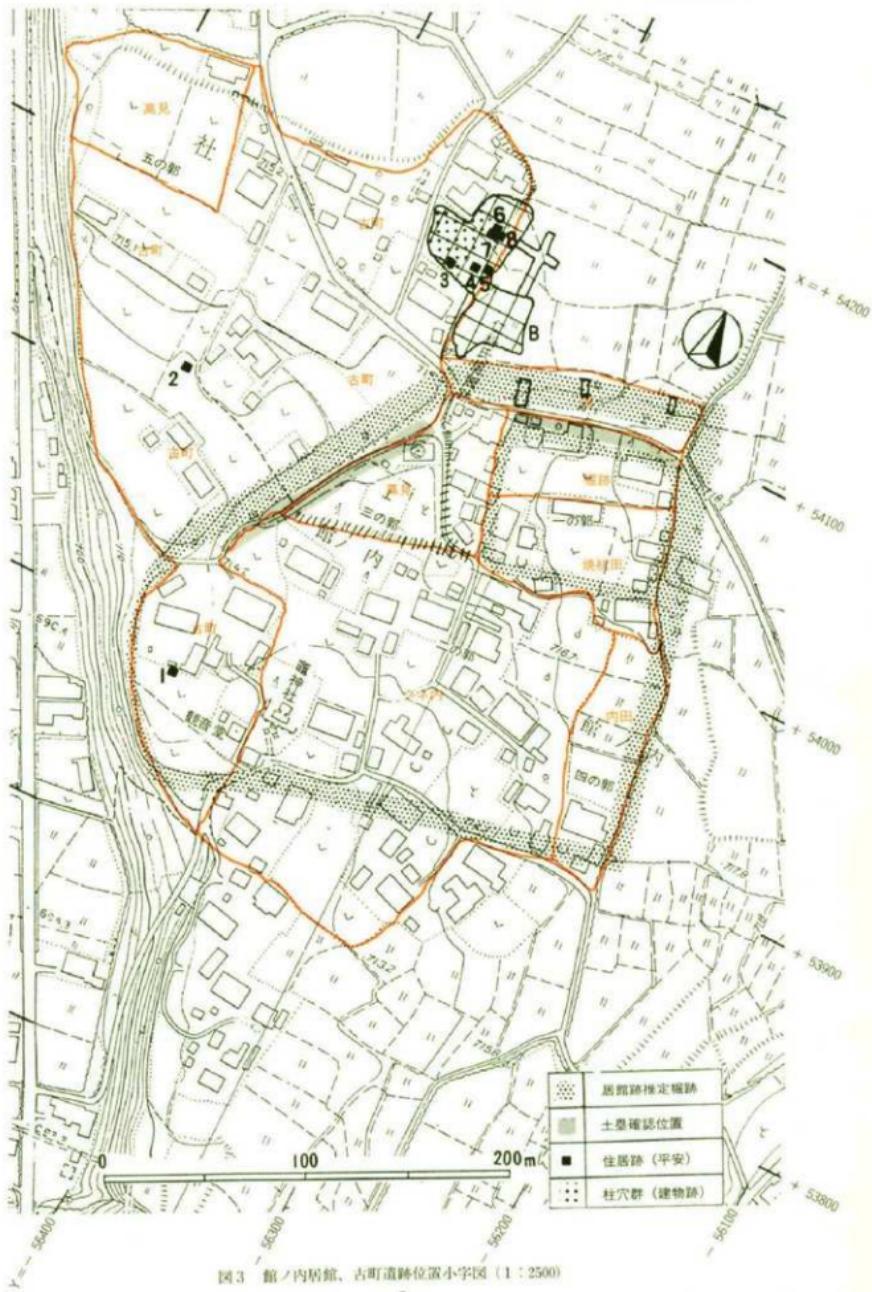


図3 館ノ内居館、古町道跡位置小字図 (1:2500)

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 立地と地形

1. 遺跡付近の立地と地形・地質

本遺跡は松本盆地の北部大町市社地区にあり、高瀬川によって形成された館の内段丘面の海拔715m付近にある。

この段丘の西は大町の平地が広がり、更にその西はフォッサマグナの西部山地である後立山連峰が南北に連なっている。遺跡の東側はフォッサマグナの堆積物である第三紀層と安山岩よりなる東部山地の低山帯が、遺跡との比高300m~400mでは南北に連なり、山麓で館の内段丘面と接している。遺跡から山麓までの距離は450m程である。

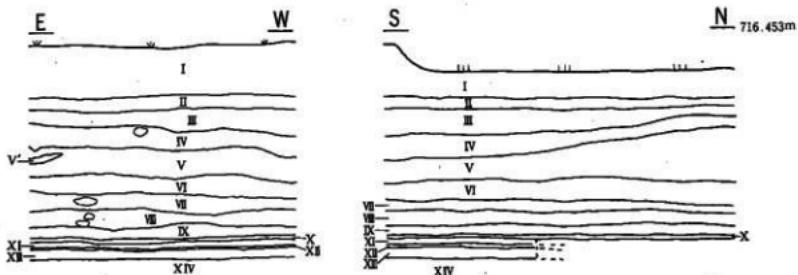
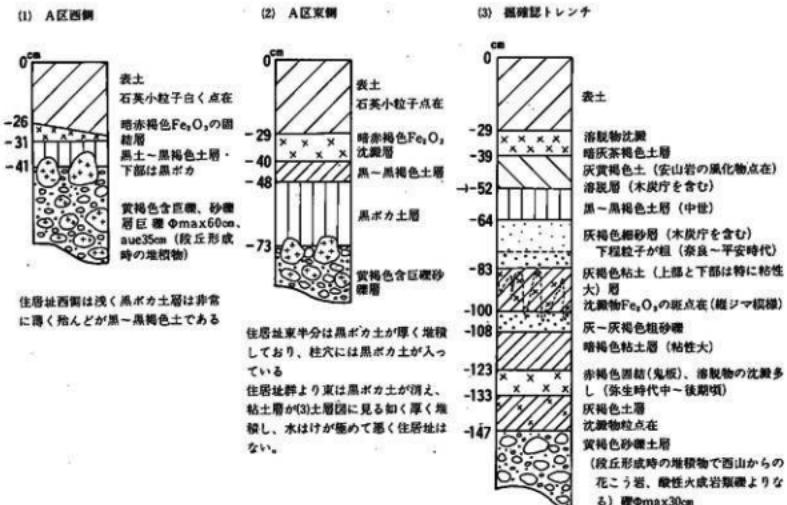
2. 館の内段丘と遺跡

館の内段丘面と高瀬川の現河床との比高は15m~20mで、高瀬川に平行に南北に伸び、南に行く程低くなり池田町付近で消滅する。この段丘面は東部山地からの崩土や崖壁が押し出し、全体として緩く西側に傾斜している。

この段丘堆積物は西部山地から高瀬川により運ばれた花こう岩や酸性火成岩類の砂礫が主体であり、最上部は東部山地より沢によって運ばれたロームと、第三系の風化物の混成によって生じた粘性の極めて大きい粘土層、細砂層、それに場所によっては、二次的のロームに起因する黒ボカ土などが数十cm~2m弱と東に厚く西に行く程薄く乗っている。段丘の堆積物中に1次堆積のロームが見られないことから、この段丘面の形成は沖積統によるものと言える。

発掘地点に限って観察すると、住居址群の西（段丘崖側）半分は浅く、No.1の土層柱状図の如く約40cm程でベースの黄褐色砂礫層に達するが、東へ行く程深くなり住居址群の東半分は、No.2柱状図の如く黒ボカ土層が厚く堆積し、この黒ボカ土が遺構面となっている。ベースの黄褐色砂礫層までは70~80cmに達し、これより東では黒ボカ土層は消え、No.3柱状図の如く強粘性的粘土層が幾重にも厚く堆積し、水はけが極めて悪くなっている。

住居址群の生活面は、ベースの黄褐色砂礫に達する柱穴に黒ボカ土が詰まっていることから、黒ボカ土が当時の生活面と考えられ、居住区は粘土層より西側の、水はけの良好な南北に細長い黒ボカ土地帯に営まれていたと推定される。



- I. 黒土・堆積褐土
II. 堆積赤褐色土 (小石を多く含む。堆積熟成段)
III. 堆積褐土 (灰斑を含む)
IV. 堆積褐色土 (中砂含む)
V. 黑褐色土 (中砂含む。腐殖を含む) (発達、平安時代段)
V'. 堆積赤褐色土 (中砂含む) (V段と連続)
VI. 堆積褐色土 (わずかに堆積熟成段。ところどころに粗質土が入る)
VII. 黑褐色土層 (灰を含む。堆積熟成段。後期段)

- VIII. 黑褐色粘土層 (堆積よりやや堆積熟成。中砂褐色ダム) (後生時代中期～後期段)
IX. 堆積赤褐色土層 (砂を含む。腐殖を含む。堆積と同じ様な性状。後生時代中期段)
X. 堆積褐色土層 (砂を含む。堆積を含む)
XI. 堆積褐色土層 (V段と連続)
XII. 堆積褐色土層 (V段と連続)
XIII. 堆積褐色土層 (堆積。マンガナイト多量)
XIV. 堆積褐色土層 (灰を含む。堆積熟成段)

図4 古町遺跡土層柱状図(上)・墓確認トレンチ1土層図(下)

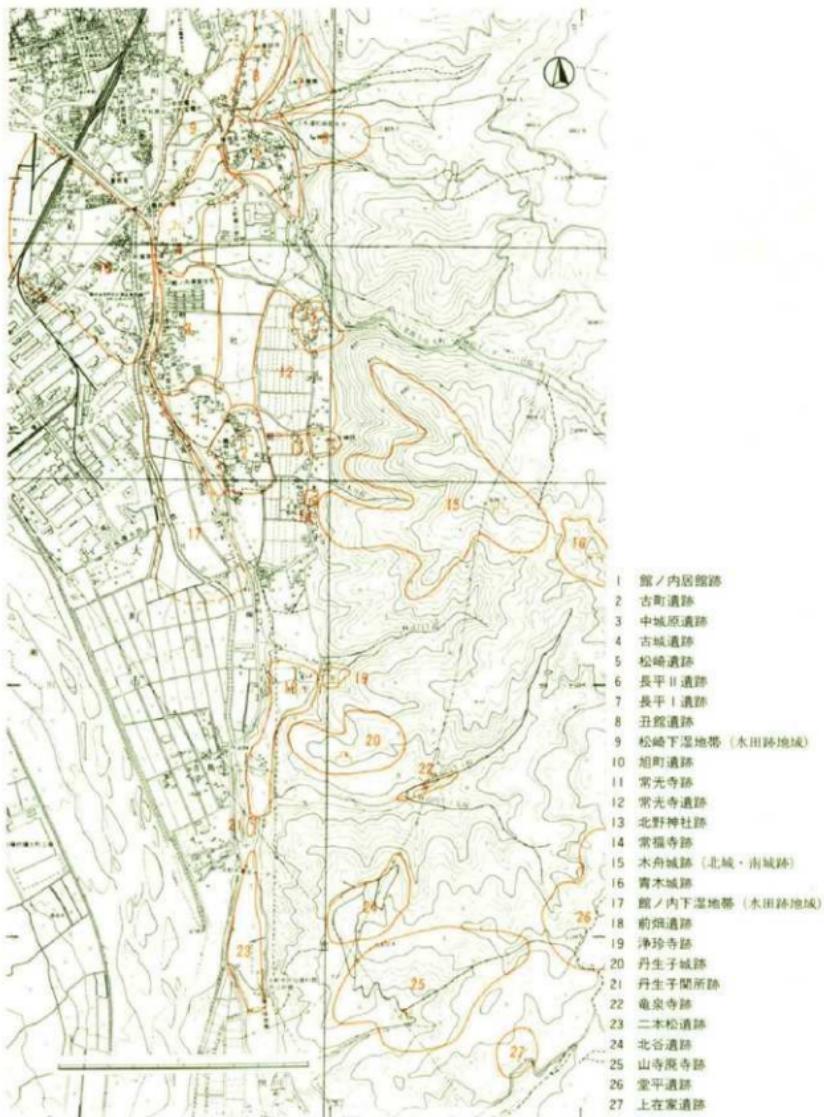


図5 社地区北部周辺の遺跡 (1:20000)

第2節 周辺遺跡と古町遺跡の過去の調査

1. 周辺遺跡

社地区北部は、中世仁科氏関係の遺産を中心に、弥生時代～平安時代の遺跡が多く見られる。館ノ内居館跡から北側の古城遺跡にかけては段丘上に続く遺跡で、時代も、绳文後期～中世まで重複しており、特に弥生時代、古墳時代、平安時代後半、中世（鎌倉・室町時代）の遺物が多く見られ、同一存在したとも思えるような一連の大遺跡群として見られる。

2. 古町遺跡・過去の調査

古町遺跡は、1981年と1982年の過去2回小規模な発掘調査がおこなわれ、2軒の住居跡が発見されている。

1981年の調査は、今年度調査地の南西約220mの位置において地主が半地下式のフレームを建設途中に発見された住居跡で1号住居跡とした。

1982年の調査は、今年度調査地の南西約150mで畠の地主が大根等の根物耕作を行った際に抜根跡から住居跡が発見され2号住居跡とした。1号、2号住居跡とも地表下30cm前後という浅い位置に遺構が存在するために調査を実施した。

大町市社地区館の内付近は、東部山麓の段丘でも最も幅の広い部分であるが、1号住居跡は、その西端に當まれた9世紀後半とみられる竪穴住居址である。中心線を真北より約20°西に向け、その規模は南北4.6m東西5.0mで南西隅がふくらんだ隅丸方形である。深さは50cmほどであるが、特徴として壁層に振りこんでいるために、四壁の大部分があたかも石を積んだように見える。今回調査した3号住居跡と同様、壁に石積みがあった可能性もある。土層は2層となり上部は礫や砂majiriの黒色土、下部は砂質の黒褐色土であった。床面にも多数の礫が露頭している。柱穴は中央より北寄りに1.4mほどへだてて2箇がある。カマドは北壁中央に設けられているがほぼ破壊され石が周辺に散乱している。

2号住居跡は1号住居跡の北東およそ100mほどの段丘の縁に近い位置にある9世紀後半後葉～10世紀初頭の竪穴住居址である。中心線はやはり真北より少し西に向いている。その規模は西壁4.2m東壁1.8m北壁と南壁も東壁にはば等しい深さ30cmの西側のやや開いた隅丸方形である。カマドは石組み粘土カマドで東壁やや南寄りにある。

住居跡内には柱穴とみられる2箇のピットの他に中心より西によって、不整形の大きなピットのあるのが注目される。北のものは東西も南北もそれぞれ1.2mほどの逆三角形状で深さ約50cm、その南端を切って長径1.2mほどのやや深いピットがある。また住居跡の西側外にも長径70cmの柱穴様のピットがあり、その中の上層で、須恵器甕の1片が入っており、中からは中世土師器杯片が検出されたことから中世の遺構と考えられる。

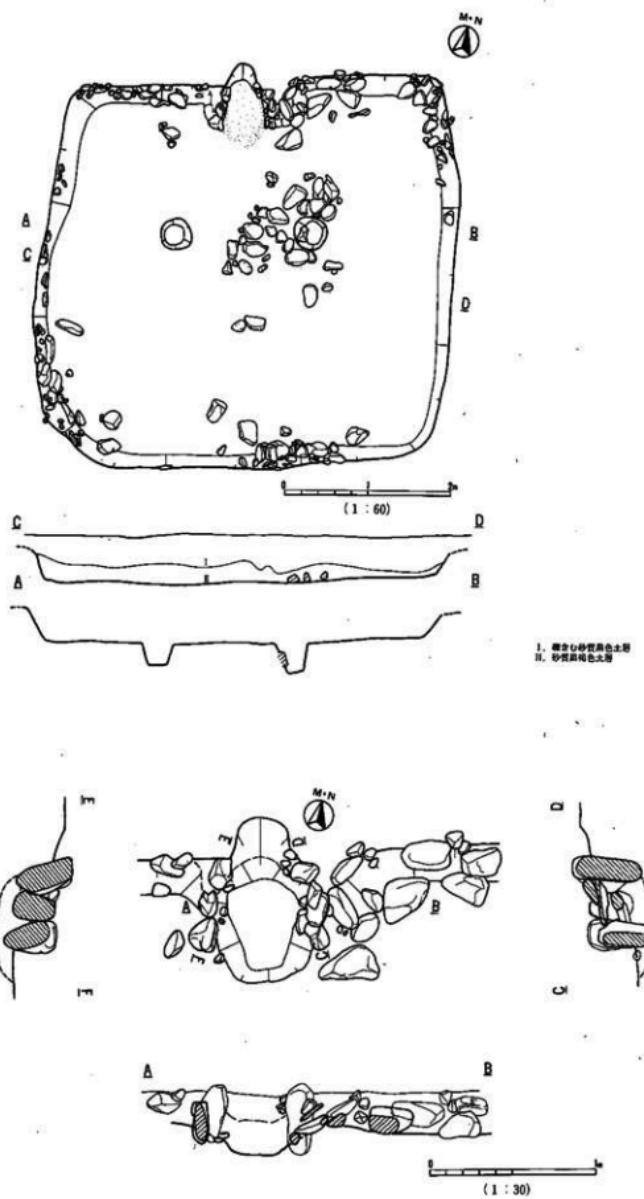


図6 1号住居跡（上・平面図1:60、下・カマド1:30）

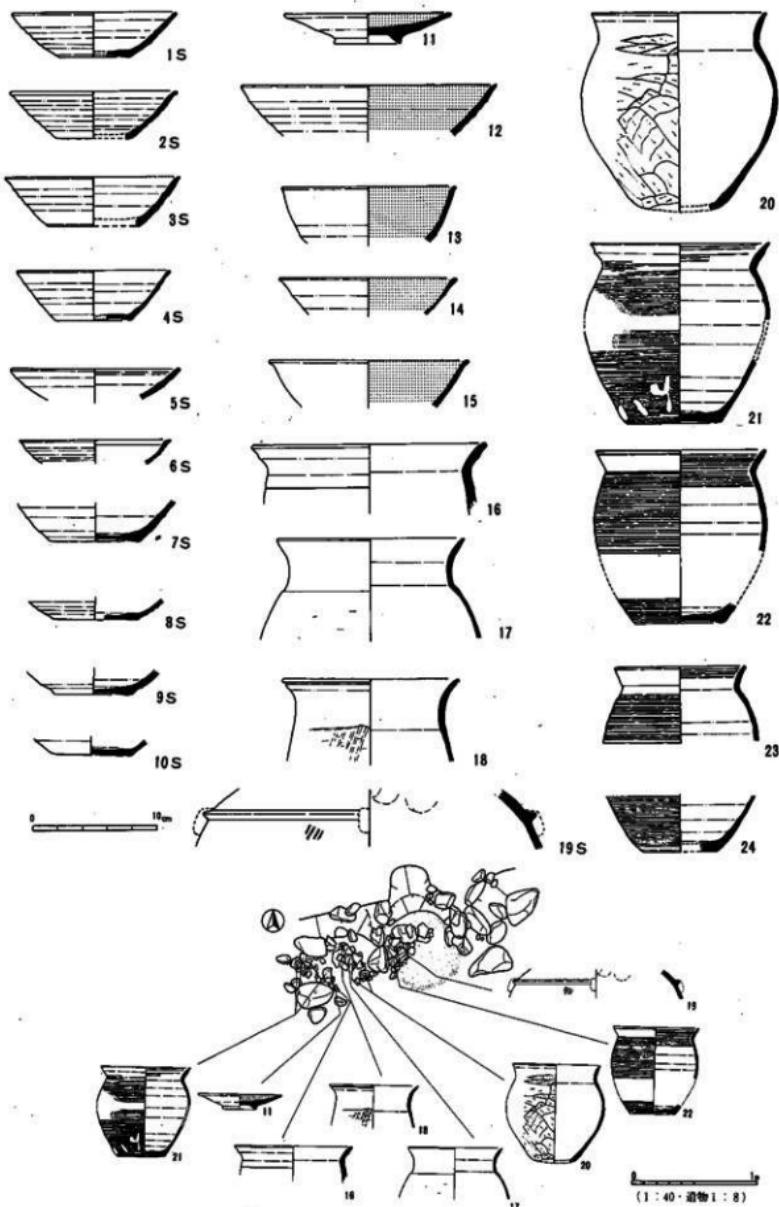


図7 1号住居跡出土遺物 (1:4) 遺物出土状況図 (1:40) (Sは須恵器、スクリートーンは黒色土器)

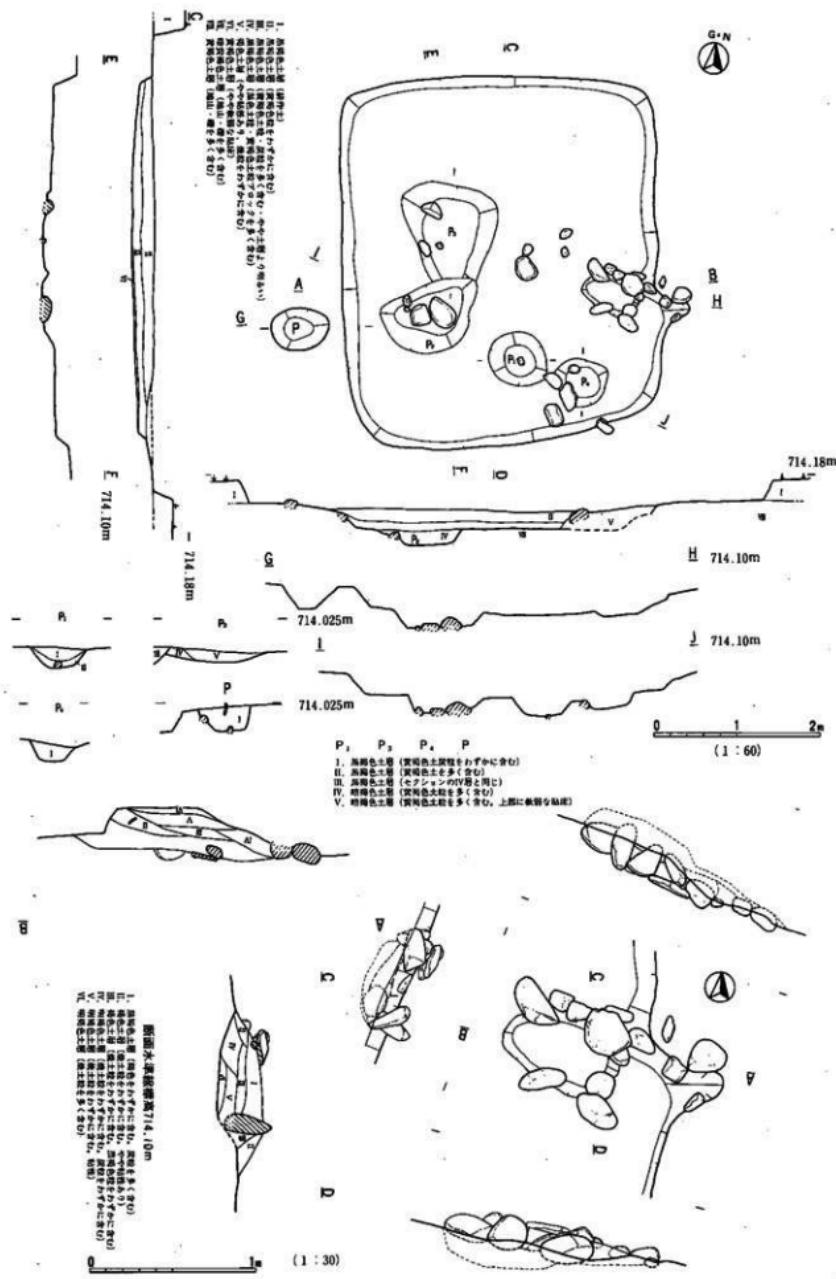


図8 2号住居跡 (上・平面図 1:60、下・カマド 1:30)

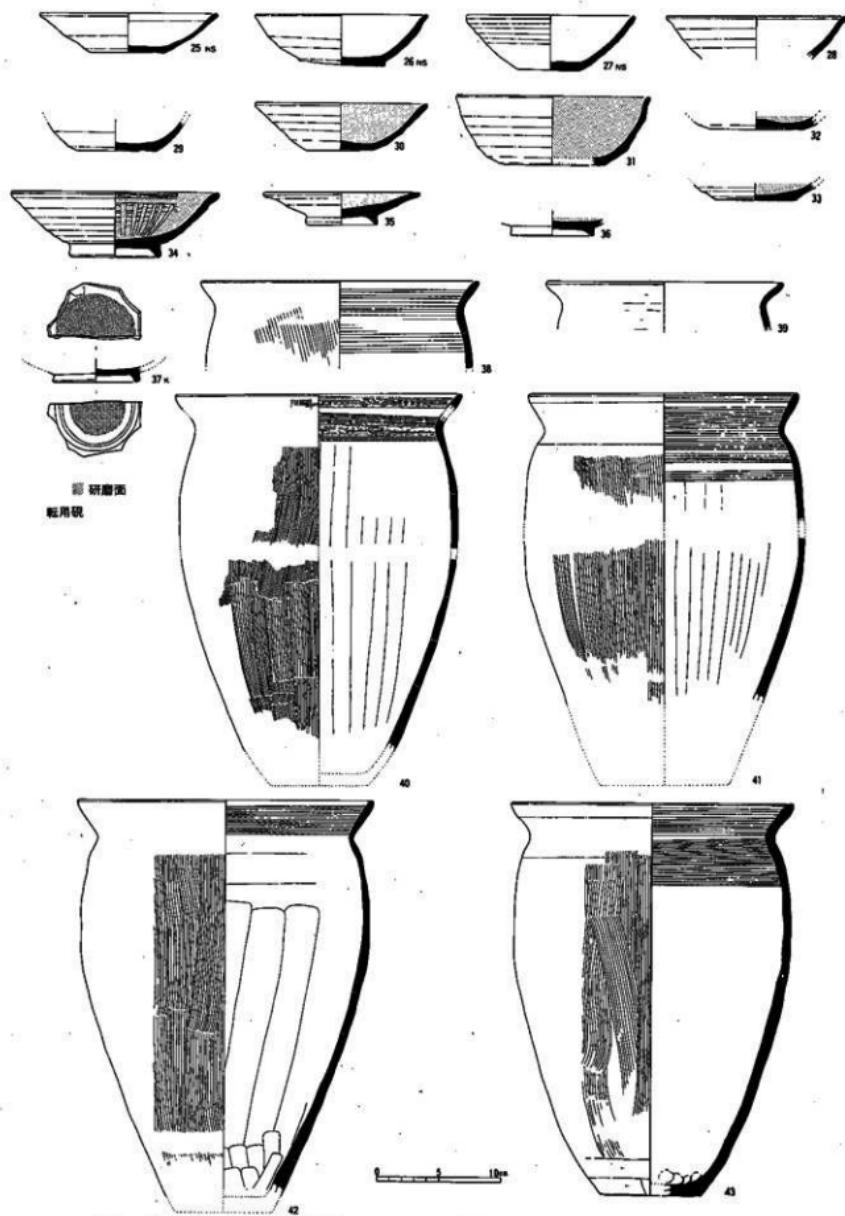


図9 2号住居跡出土遺物実測図(1)(1:4, 50は1:2) (NSは軟質須恵器、Kは灰釉陶器、スクリーントーンは黒色土器)

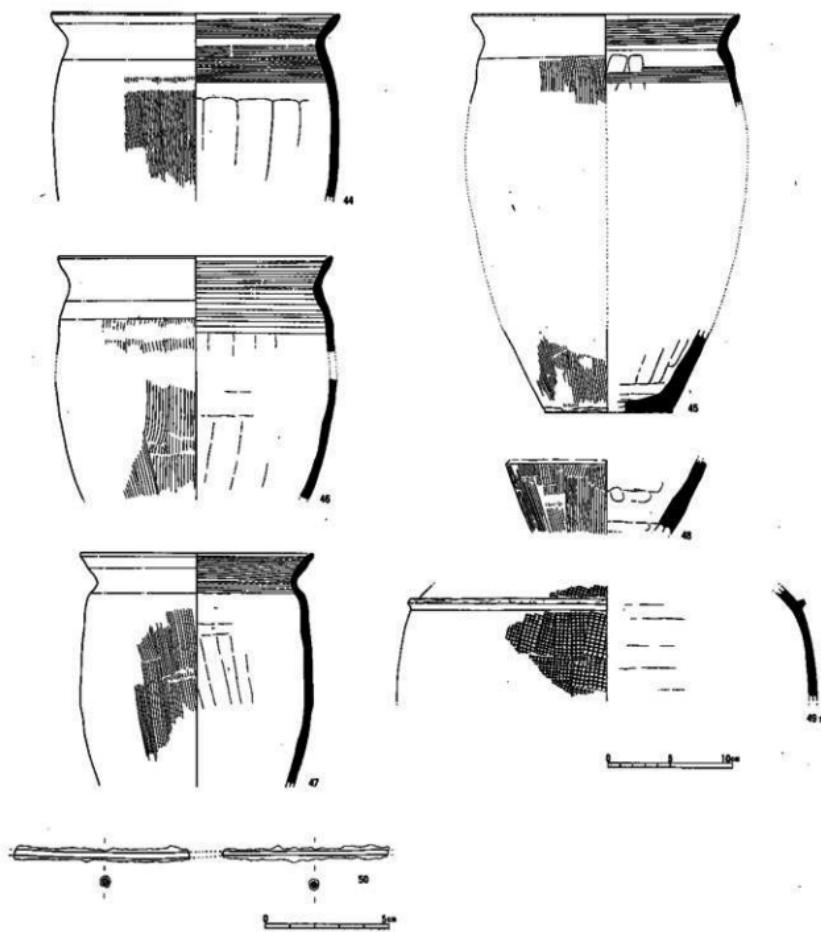


図10 2号住居跡出土遺物実測図(2) (1:4) (Sは須恵器)

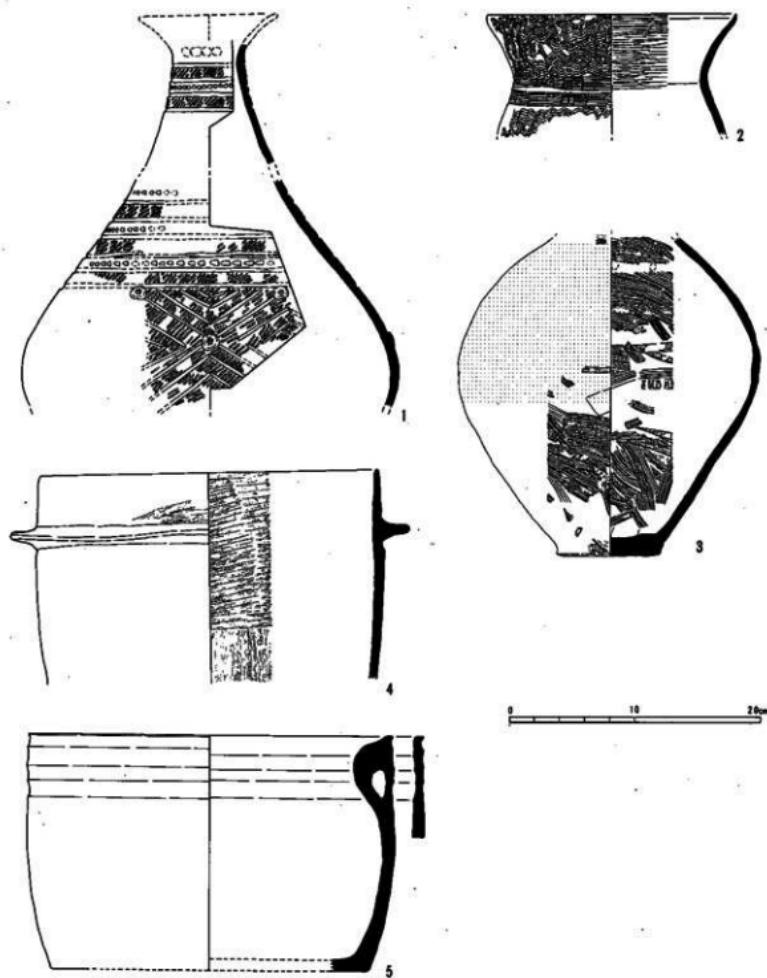


図11 館ノ内居館跡、古町遺跡概出遺物 (1:4)

第III章 遺構と遺物

第1節 平安時代の遺構と遺物

A区からは、平安時代住居跡5軒・中世住居跡（豎穴）1軒・ピット204基・溝4基・配石が検出されている。層位については時代別区分はA地区において、土層が浅いために同一となっていた。ただし堀グリットにおいてはその区分がある程度できた（図5 土層図参照）。

1. 平安時代の住居跡

3～5・7・8号住居跡5軒が検出され、すべて隅丸豎穴住居跡である。すべてカマドをもち、3・4・8号住居跡は北壁中央に、5号住居跡は東壁中央に、7号住居跡は北東壁隅にある石組み粘土カマドである。主柱穴と思われるものがはっきりとしたものは8号住居跡のみで4本柱である。

この中でも3号住居跡は、壁に一部壊れているが、四方の壁に石垣状の石積みをもつ住居跡である。規模は、掘り方と思われる石積み周囲の段を含めた全体で東西6.2×南北5.8m、石積み内で東西4.8×南北4mである。深さは検出面から50～60cmである。床面は、西側約1/3が10cm高くなっている。床面はさほど堅くない。床面には、19ヶのピットが検出されたが、主柱穴とははっきりするものは見られない。東壁寄りのコの字状に連なったピットは間仕切り的な小さな区画的な柱穴とも思われ、また、南北を区切るように南北のほぼ中央にはコの字状に連なる柱穴も含め並んでおり、住居跡は、床面の段も考え、西に向いた丁字状に区画されていた可能性が考えられる。カマドは、北側ほぼ中央にあり、100×100cmの石組み粘土カマドで、石積の下側の石の接する空間を煙道とし、掘り方にても浅い煙道の凹が見られ外へ出る。南壁中央には掘り方が切れ、緩やかに外から内側に傾斜する面があり、これが入口にあたるものと考えられる。住居周囲には、P128～141-202の13ヶの柱穴が見られ、この内の一部には本住居跡に関係した柱穴があるものと考えられるが、はっきりとはしない。本住居の埋土中には、ほぼ全面に人為的に入ったと思われる礫が見られた。

他の住居跡の規模を示しておくと次のとおりである。4号住居跡・東西4.5×南北4.3m・深さ30cm、5号住居跡・東西4.3×4.1m・深さ20cm、7号住居跡・東西3.9×南北3.7m・深さ15cm、8号住居跡・東西4.2×南北4.7m・深さ40cmである。

出土遺物は、土器では、土師器・黒色土器を中心に、須恵器・軟質須恵器（土師器的な、軟質な、黒斑をもつこともある須恵器）、灰釉陶器がある。出土遺物のおおまかな年代を示しておくと、3・8号住居跡は、須恵器をもつことから、9世紀後半、4・5号住居跡は、須恵器がなく、軟質須恵器をもつことから9世紀後半後葉～10世紀初頭、7号住居跡は、東濃系灰釉陶器の大原窯式・虎渓山窯式を共伴することから10世紀後半～11世紀初頭に位置すると考えられる。

9世紀後半の土師器甕には、在地系の刷毛目・カキ目の施されたもの（31～33・39～41）、ヘラケズリが施された薄い器壁の武藏型に類似する甕の2種類がある。41は胴下半に沈線が入っているものと考えられる。遺構外出土の56は古墳時代、5世紀後半の土師器高杯の脚部である。54・55は、土師器杯で、次項の柱穴群に関係したものとも考えられる。この他に3号住居跡から刀子等の鉄製品、砾石が出土している。

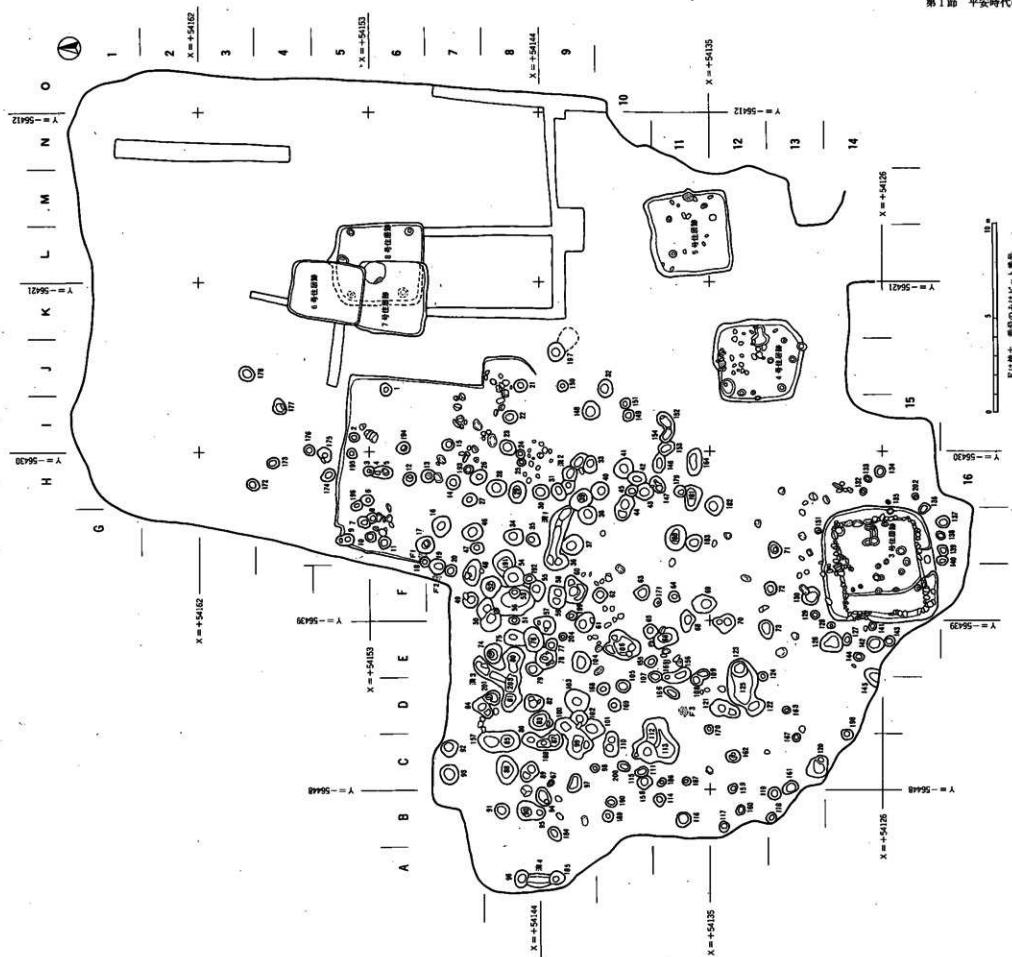


図12 古河遺跡全般図 (1 : 200)

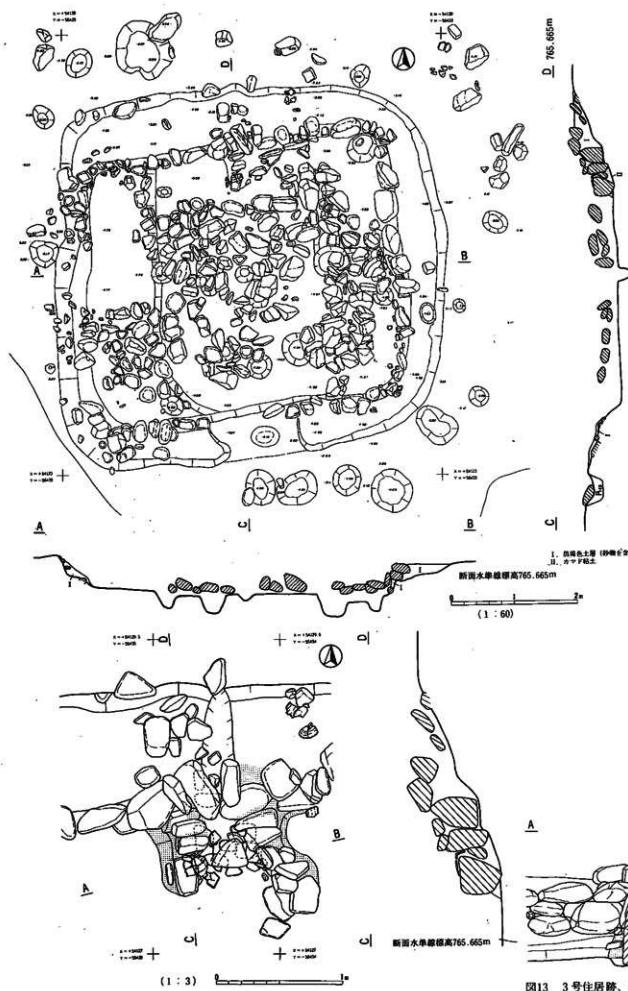
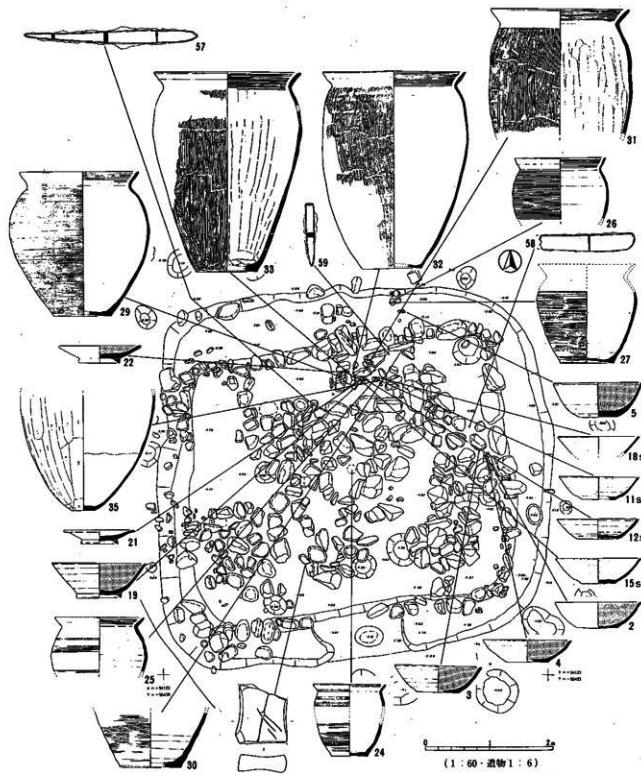


図13 3号住居跡、壁、遺物出土状況 (1:60)・カマド (1:30)



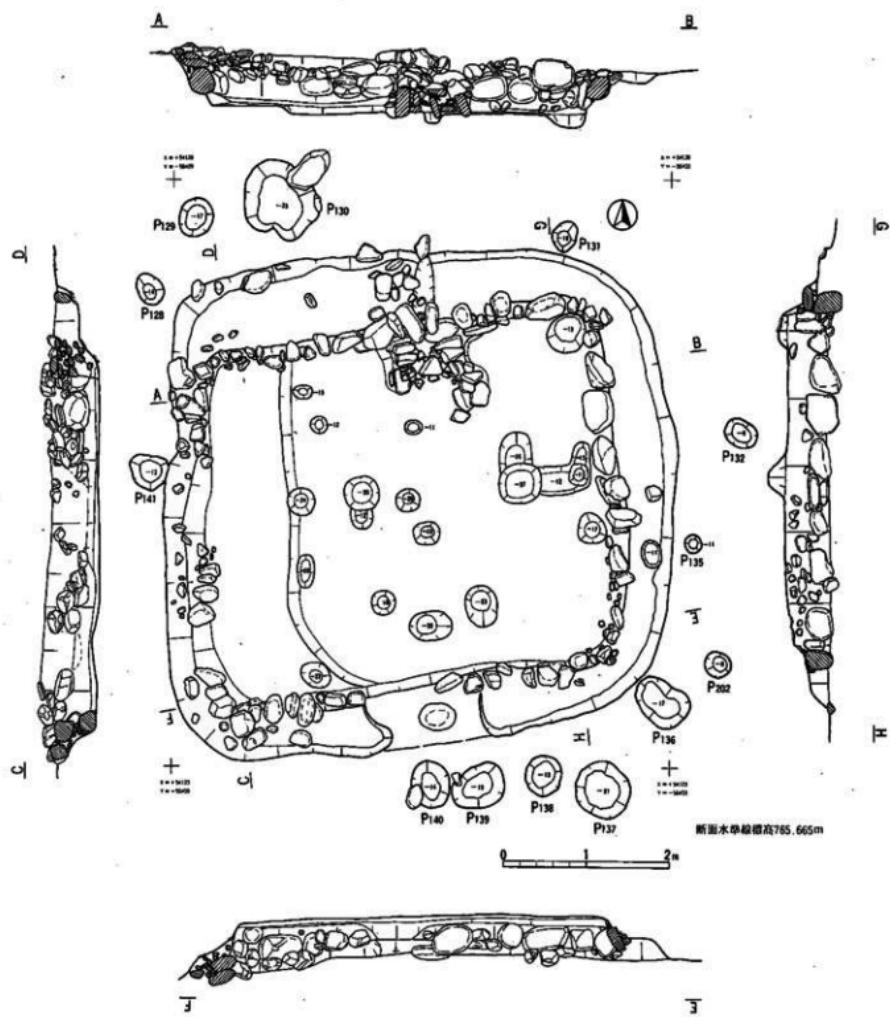
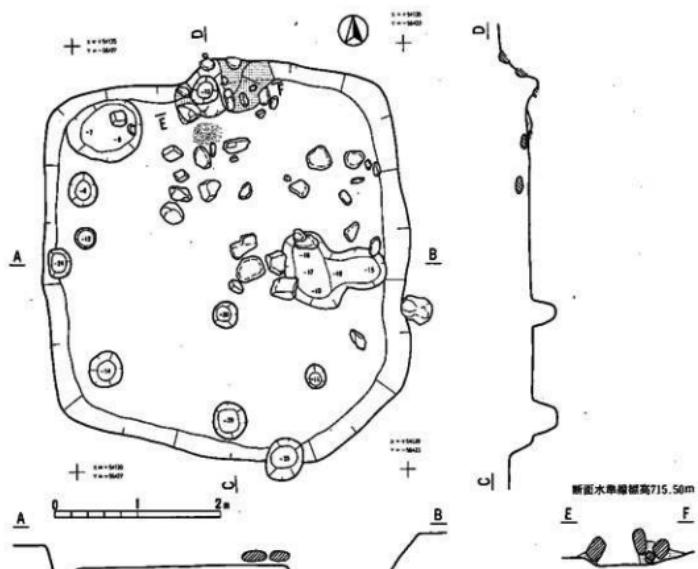


図14 3号住居跡 (1 : 60)



4号住居跡

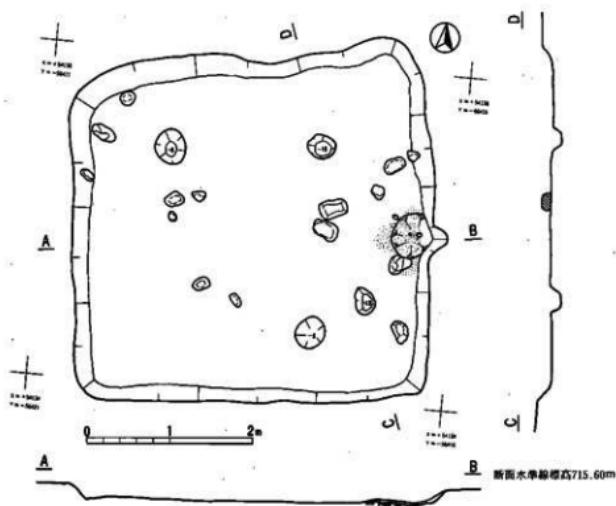


図15 4号、5号住居跡 (1:60)

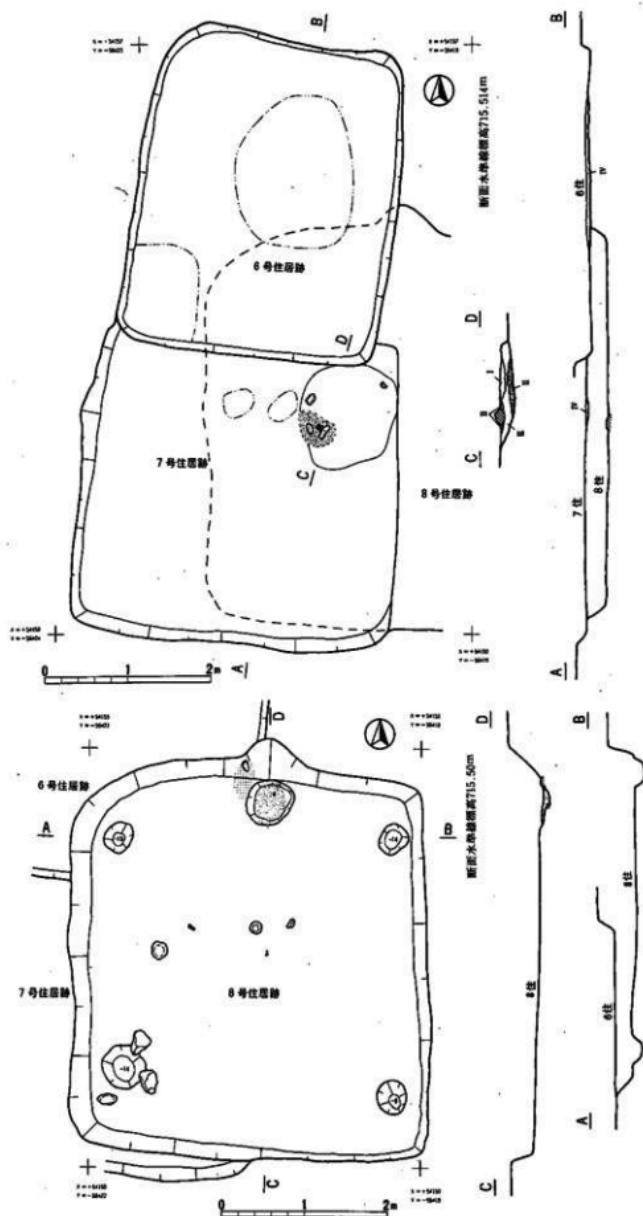


図16 6号、7号、8号住居跡 (1:60)

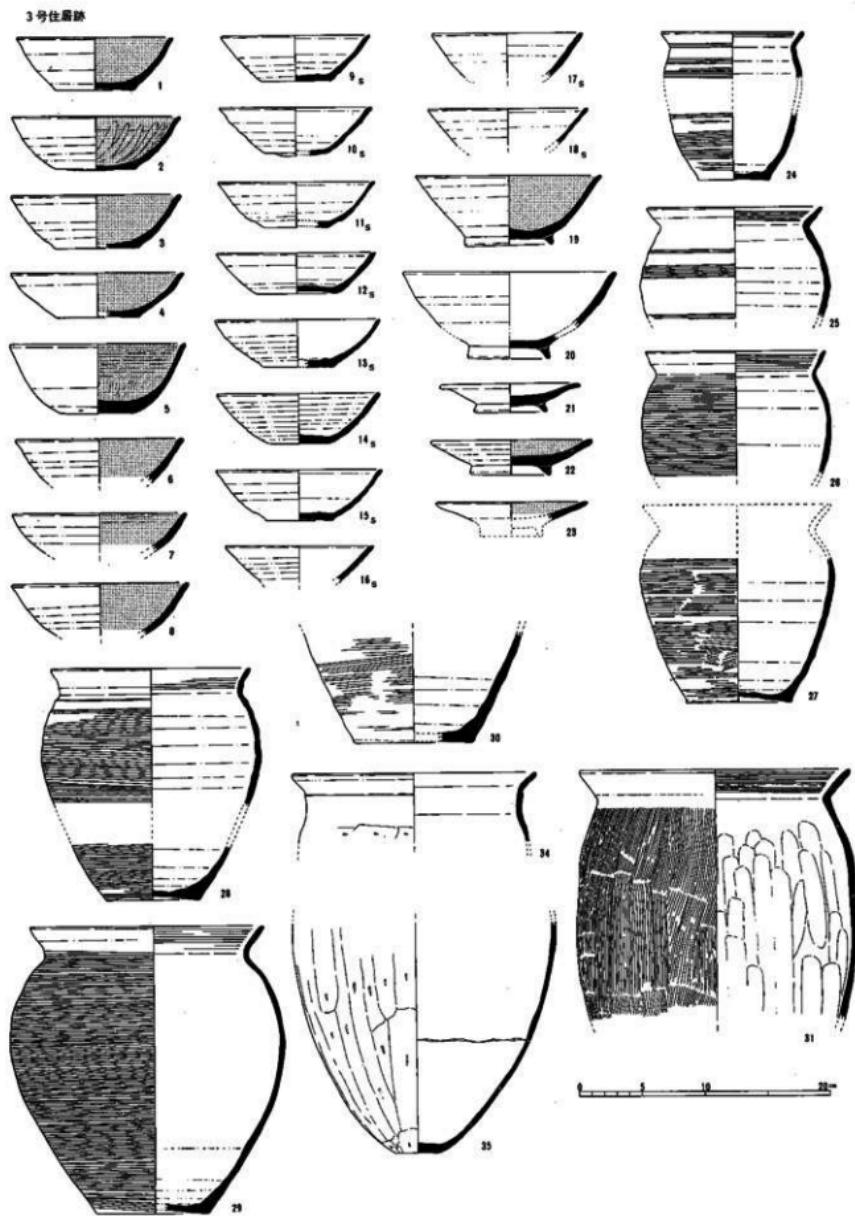


図17 平安時代土器実測図(1) (1:4) (Sは須恵器、スクリーントーンは黒色土器)

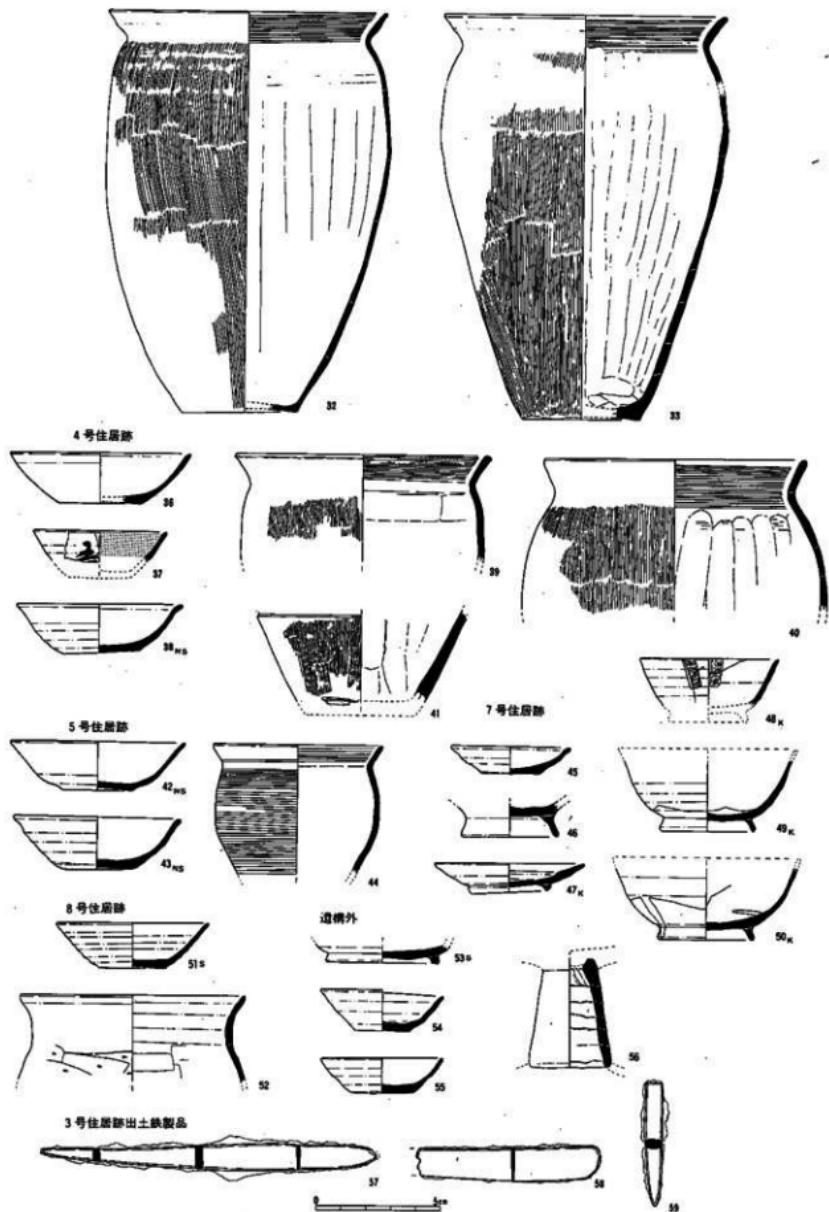


図18 平安時代土器・鉄製品実測図(2)(1:4) (Sは須恵器、NSは軟質須恵器、スクリートーンは黒色土器、Kは灰釉陶器) (57~59は1:2)

第2節 古代末～中世の遺構と遺物

竪穴住居跡（6号住居跡、住居跡としたがいわゆる竪穴である。）1軒、ピット（柱穴・土坑）204基の建物跡群（ピット群）、溝4基、配石1基、焼土3箇所が検出された。

6号住居跡は、東西3.1×南北3.6m、深さ10cmの隅丸方形で、柱穴等の施設は検出できなかった。床面の中央（二点破線）は灰色粘土の貼床で堅く、南西コーナー附近の床面（一点破線）も堅い床面となっている。

ピット群は204基中、ほとんどが建物跡に関係した柱穴と思われ、建物跡がいくつも重複している。ピットの中でP197は、焼土・粘土が多量に認められ、鉄滓・鉛滓・羽口片・窯体等が出土し、南西隅には鉄滓・鉛滓等が約1mの範囲に散乱した部分が認められたことから、P197は鍛冶関係の土坑で、溶鉱炉的なものであり、南西隅の鉄滓等の散布地点は灰原であったと思われる。

規模の大きいP53・106・112・113・125などは、P125から炭化米穀（米としたが麥である可能性が高い）が出土していることなどから貯蔵穴とも考えられる。

建物跡群の建物跡の柱穴配置、規模等ははっきりとは確定できないが少なくとも10棟は切り合っているものと考えられるが、建物の配置、柱穴配置、柱穴内部の仔細な検討は今後の課題したい。ピット内の埋土は、ほとんどが黒褐色土であり、検出は砂礫層まで下げないと検出できなかつたので深さは現深より10~40cmはあったものと考えられる。また、柱穴内には、礫石状の石が入るものも見られた。柱底等は、埋土が前記のように黒褐色土であったことから確認できなかつた。4基の溝跡も、柱穴が結がり溝状になつたものと思われ、建物跡の柱穴の一部と考えられる。

出土遺物は、土師器皿、杯、内耳鍋、国産陶磁器（東海系、須恵質陶器）、輸入陶磁器（白磁、青磁、青白磁）、砥石、研磨砾、鉄製品、銭、鉄滓・鉛滓、羽口等がある。

土師器の量が最も多く、すべてロクロ成形、底部回転糸切りであり、手づくねのものは検出していない。杯は概して大・中・小の大きさに区分できる。内耳鍋は、15世紀後葉~16世紀のものであろう。国産陶磁で、山茶碗の71、72は瀬戸系の初期のものと思われる。

73、74は、東濃系明和または、白土原窯式のものである。輸入陶磁器のうち、白磁は、横田・森田分類（横田・森田1978）を使用していくと、99は白磁II類の皿、100はII類碗、101~103はIV類碗である。104の白磁はやや後出する白磁である。青白磁のうち105は皿、106は蓋、107は合子、108は碗である。青磁はすべて碗で、109が同安窯系青磁の他は、龍泉窯系の碗である。

鉄製品は、1は火打ち金具、2は不明鉄製品で、多くは鉄釘（和釘）である。銭はすべて、宗銭で輸入銭である。22は天聖元宝、23は元祐通宝、24・25は淳化元宝、26は熙寧元宝、27は元豐通宝、28は大平通宝、29は明道通宝である。

出土遺物の年代を土器、陶磁器年代から見ていくと、11世紀末~12世紀、13世紀後半~14世紀代、15世紀後葉~16世紀の3時期に大まかに分けられる。

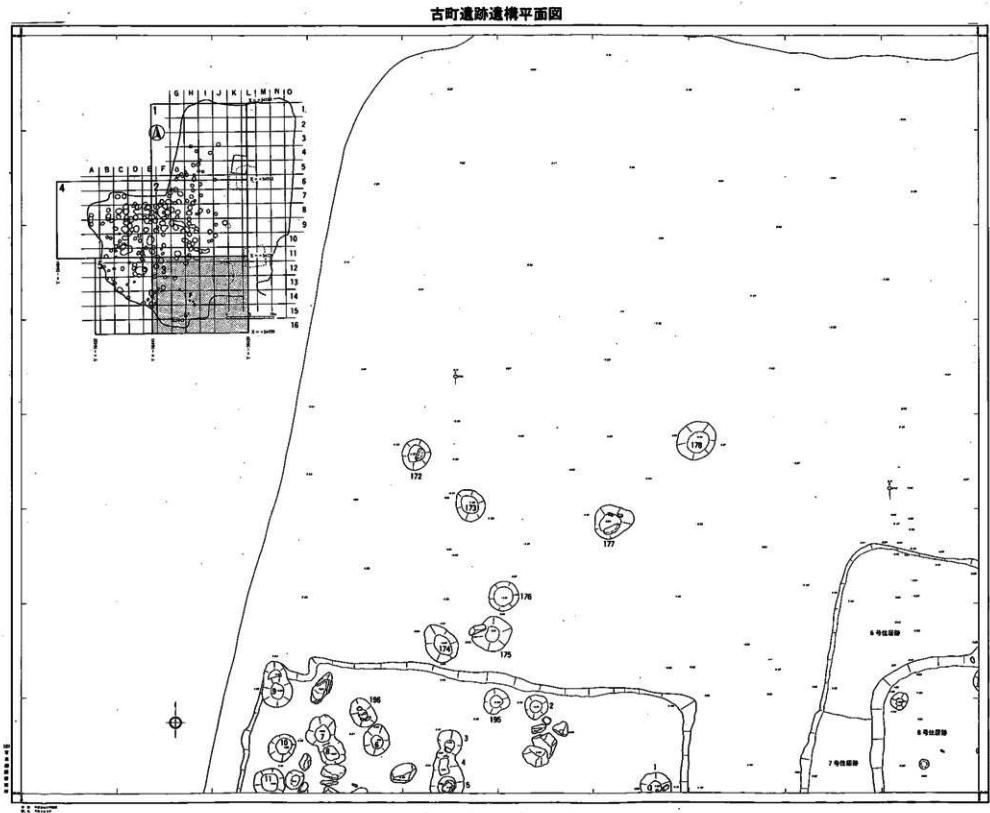


図19 遺物跡群(ピット群) 平面図1 (1:80)

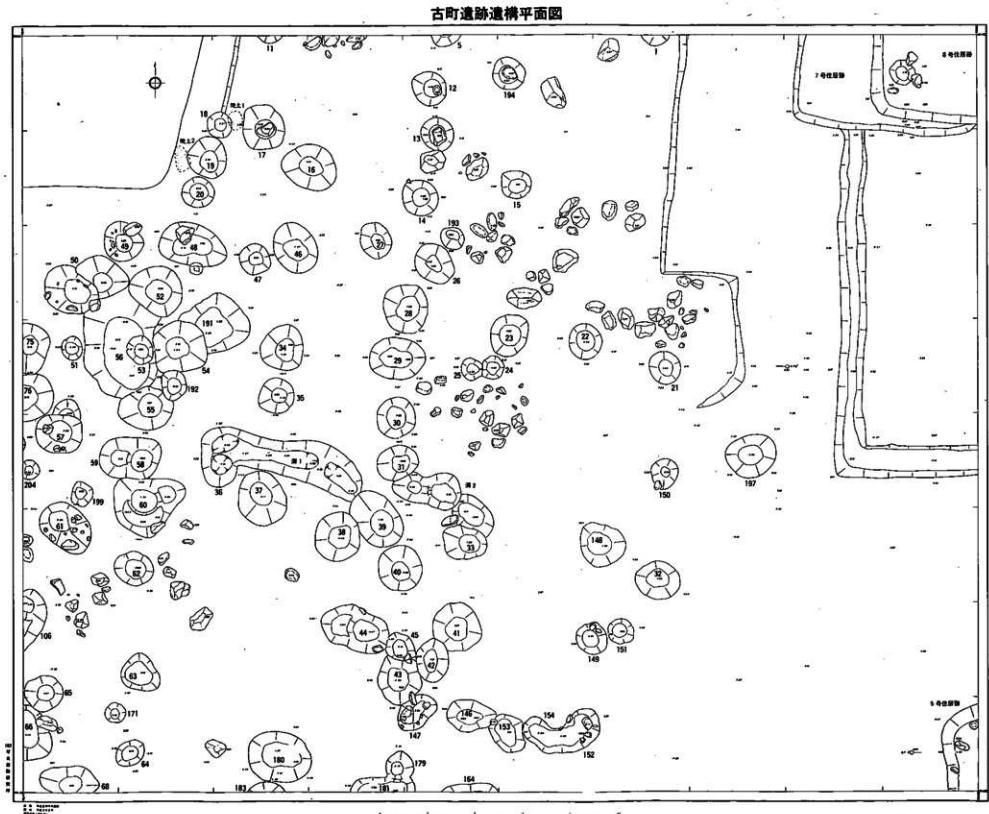


図20 建物跡群（ピット群）平面図 2 (1 : 80)

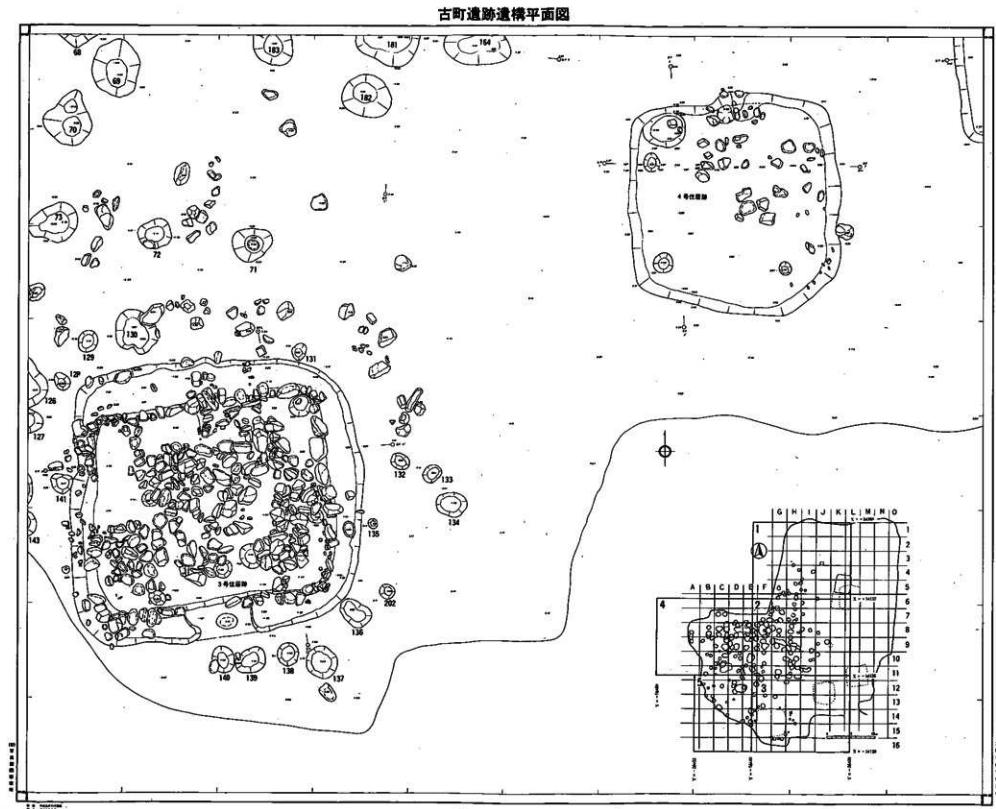


図21 建物群群(ピット群) 平面図3 (1:80)

古町遺跡遺構平面図

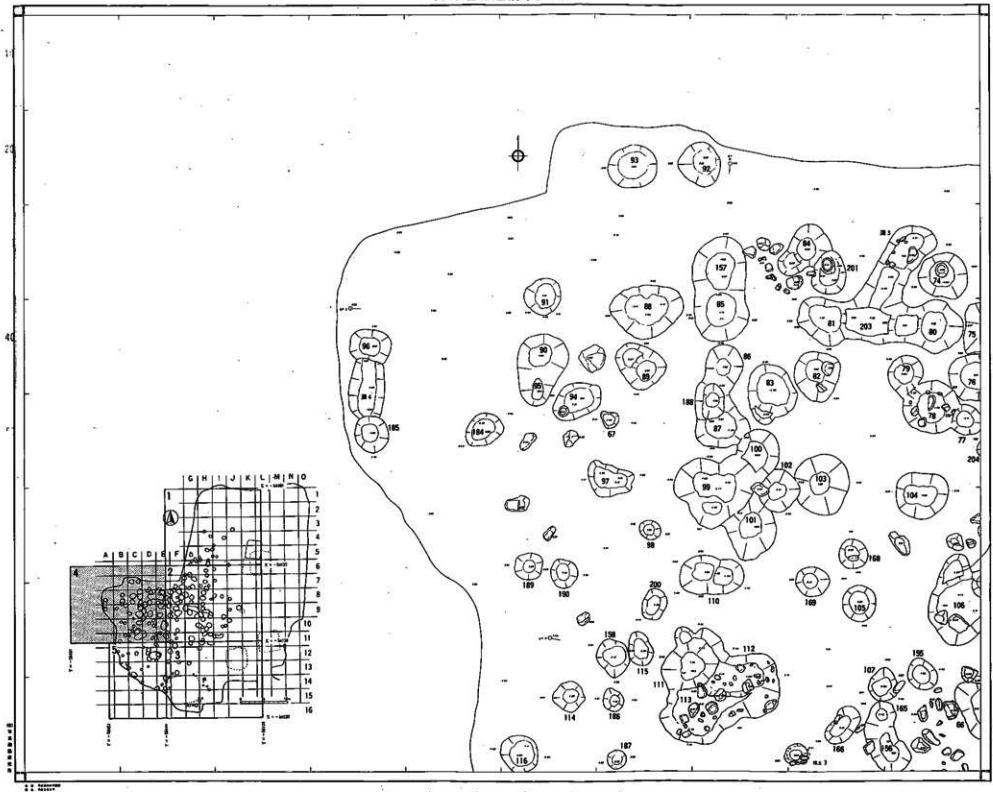


図22 建物跡群(ビット群) 平面図 4 (1 : 80)

古町遺跡遺構平面図

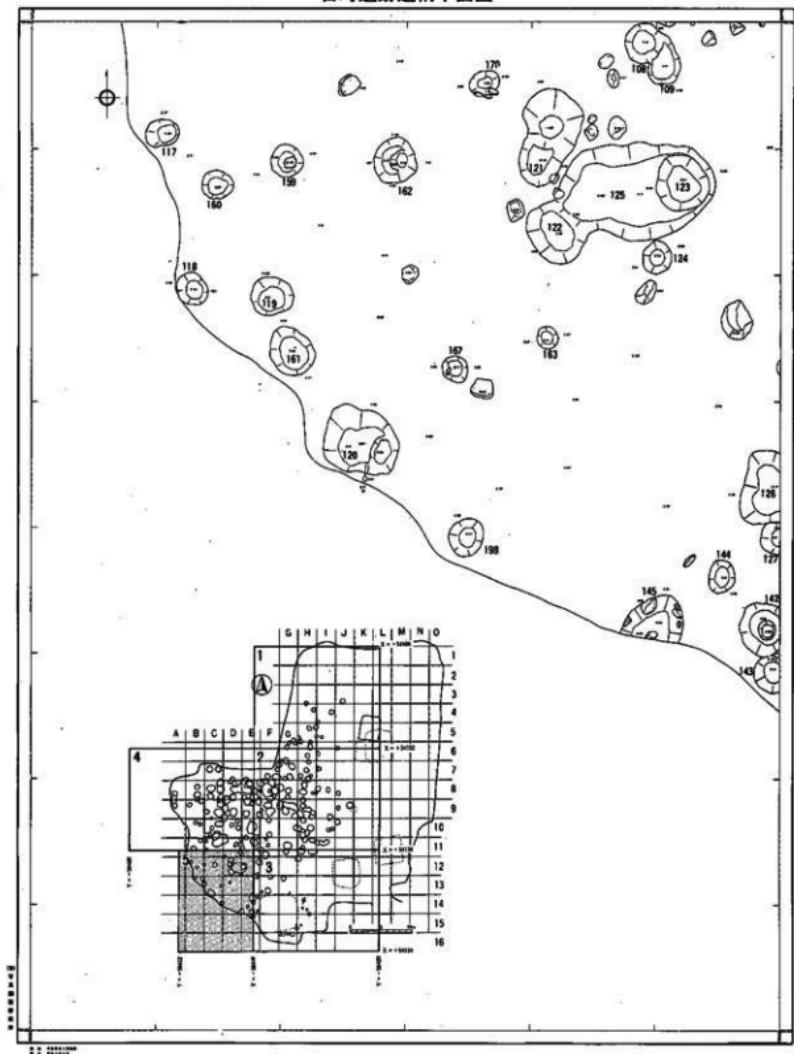


図23 建物跡群（ピット群）平面図 5 (1:80)

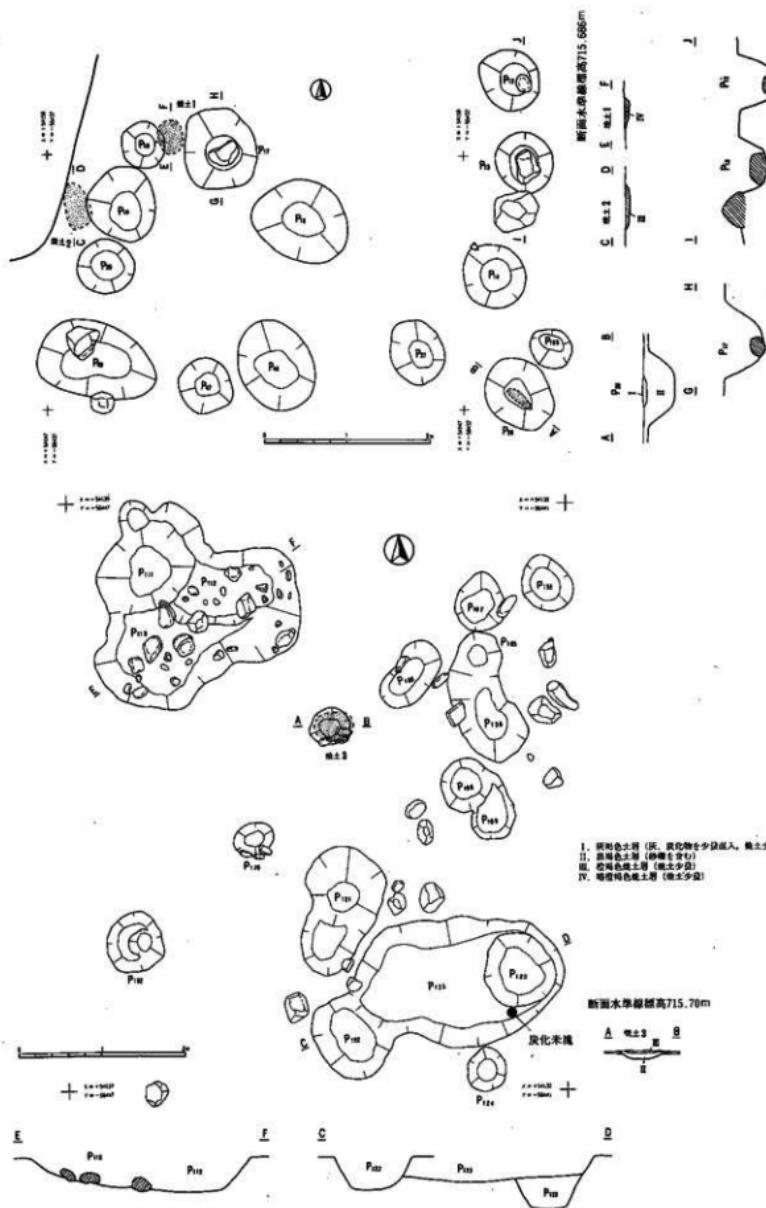
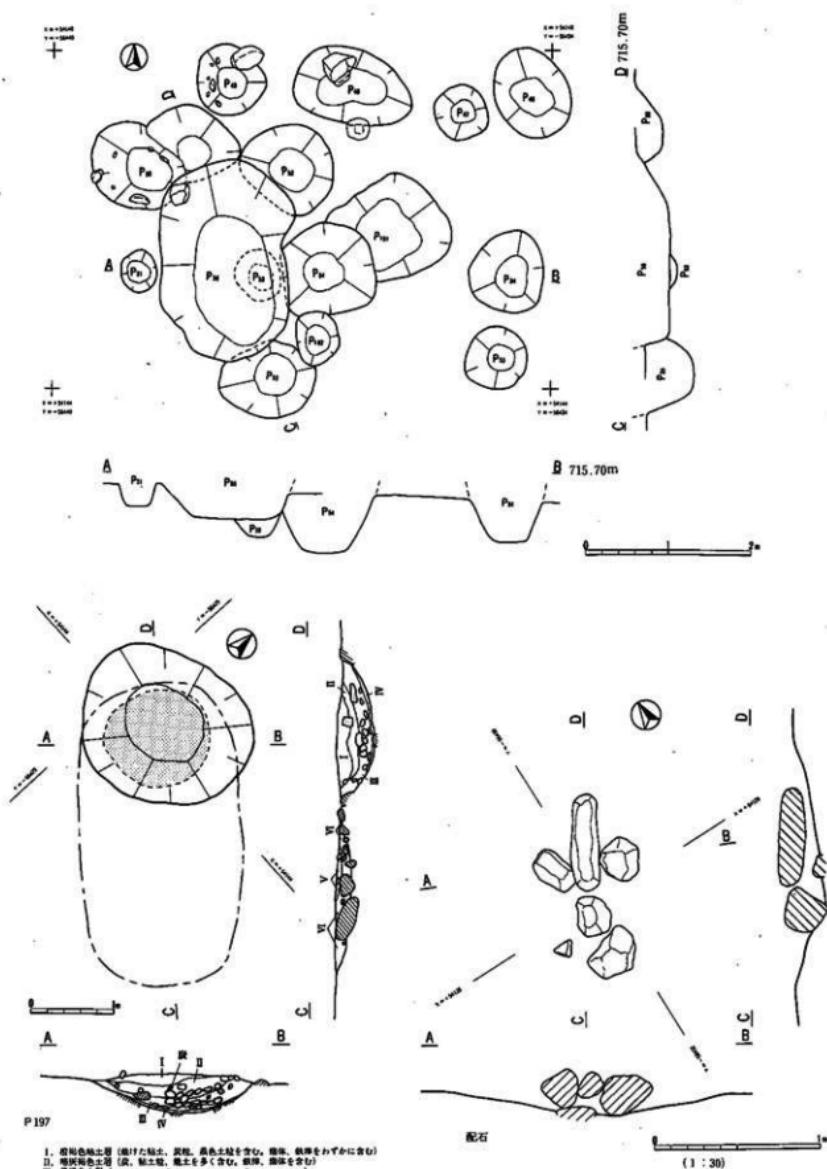


図24 ピット群及び焼土1～3 (1:30)



- I. 黒褐色地土層（焼けた粘土、灰粒、黑色土粒を含む。褐色、灰津をわずかに含む）
- II. 黄褐色地土層（灰粒、粘土等、褐色を多く含む。褐色、灰津を含む）
- III. 黑褐色地土層（灰粒、粘土等を含む。黒津を含む）
- IV. 中やや黒褐色地土層（灰粒、粘土等を含む。黒津を含む）
- V. 黑褐色地土層（灰粒、粘土等を含む。黒津を含む。四よりは少ない）
- VI. 黑褐色地土層（灰粒、粘土等を含む。黒津を含む）

図25 ピット群 (1 : 60)・P197 (鍛冶関係土坑)・配石 (1 : 30)

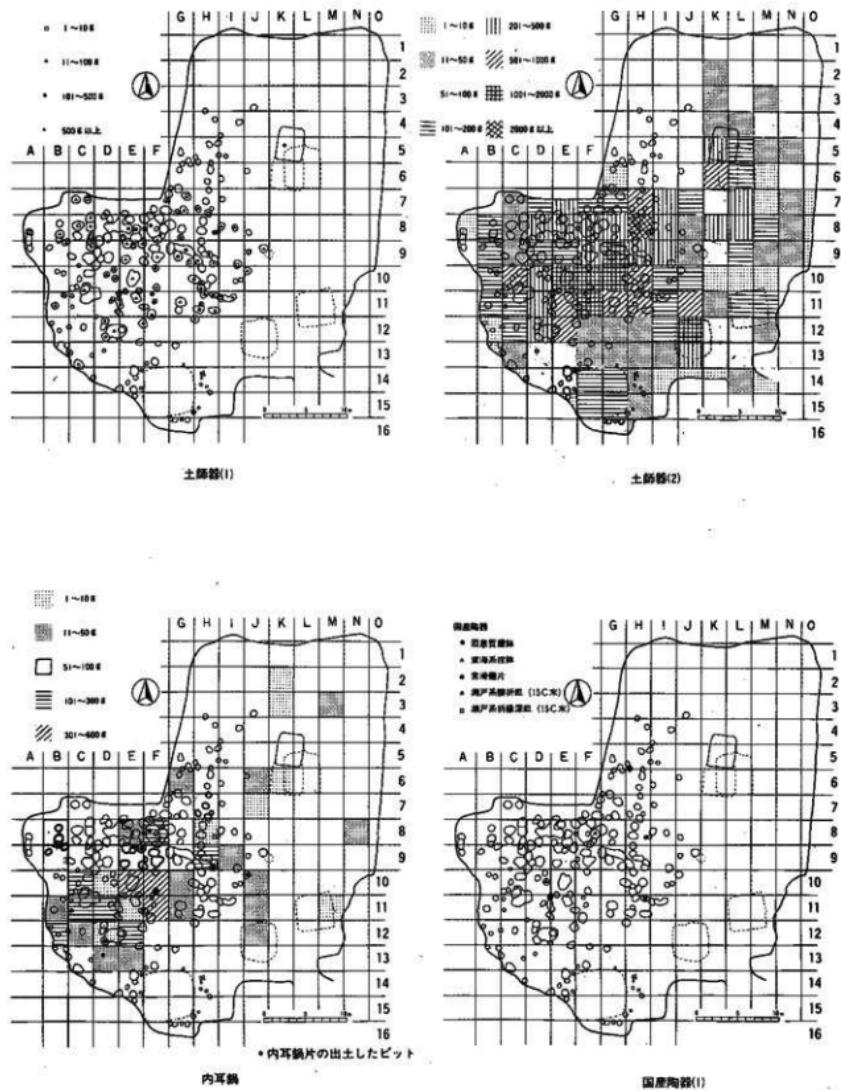


図26 A地区中世遺物分布図(1) (1:600)

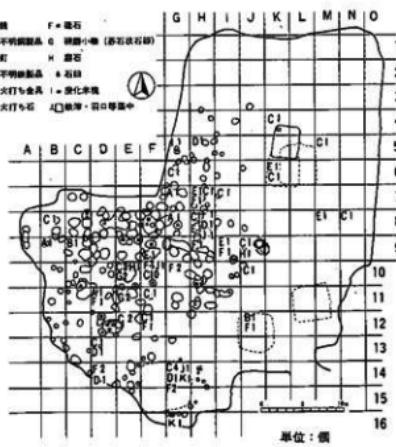
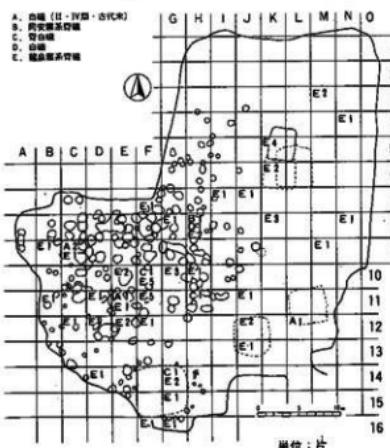
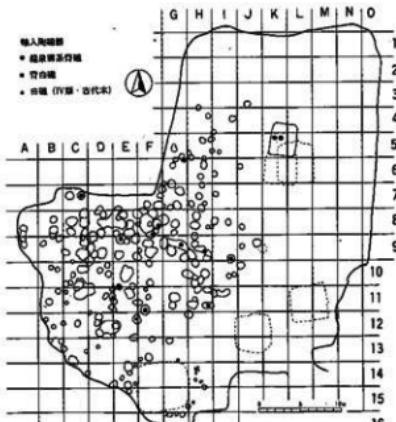
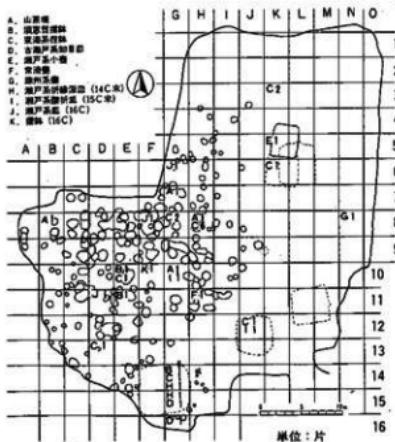


図27 A地区中世遺物分布図(2) (1:600)

古代末～中世遺構一覧表

遺構番号	規 模 (cm)	深 さ (cm)	出土遺物			石 製 品 (片)	金 屬 (個)	其 の 他	備 考
			土器	内耳輪	施入陶磁(片)				
6住	372×316	8~12	247.9	2					
P 1	65×65	27							
P 2	51×49	14							
P 3	56×52	25							
P 4	54×—	30.							P 4を切る。
P 5	70×64	19							P 3、5に切られる。
P 6	67×54	23							P 4を切る。底部に礫石状石有
P 7	69×60	22							P 8を切る。
P 8	52×47	20							P 7に切られる。
P 9	98×83	11							底面2枚。
P 10	60×51	37							
P 11	65×83	31							
P 12	77×72	26							
P 13	73×70	11							
P 14	82×74	50							
P 15	62×58	25							
P 16	119×56	46							
P 17	96×56	23							
P 18	54×54	31							
P 19	85×81	61							
P 20	69×54	35							
P 21	70×53	32							
P 22	75×69	39							
P 23	87×76	36							
P 24	49×45	50							
P 25	47×45	43							
P 26	90×76	37							
P 27	77×64	28							
P 28	104×96	46							
P 29	117×86	47							
									海貝承襲折皿 (15C末)
									不明鉢1
									P 25に切られる。
									P 24を切る。
									上面に灰層有。
									1.2

通鑑番号	規 模 (cm)	深 さ (cm)	出				土 造 物				其 他 (g)	備 考
			土師器 (cm)	内耳鍋 (cm)	輪入陶 (cm)	磁 白磁・青白磁 (片)	国 産 陶 磁 (片)	石 集 品 (個)	金 属 器 (個)	そ の 他 (個)		
P30	88×83	53										
P31	87×68	34	14.0	10.1								
P32	98×80	27	73.5	160.1								
P33	93×74	58										
P34	98×89	45	73.8									
P35	73×71	54	40.0									
P36	80×75	36										
P37	115×100	39	23.7									
P38	105×96	55	5.7									
P39	130×90	53	79.8									
P40	96×91	43										
P41	108×105	34										
P42	90×67	24										
P43	105×86	4	220									
P44	139×90	34	125.6									
P45	60×55	18	15.0									
P46	105×86	36	16.4									
P47	65×62	39	20.5									
P48	144×90	50										
P49	85×84	29										
P50	168×116	72										
P51	48×43	27	10.5									
P52	108×105	11										
P53	59×50	22										
P54	122×115	68										
P55	114×90	56	61.0									
P56	243×147	37	287.3	91.7								
P57	100×80	10	30.6	57.4								
P58	90×70	41										
P59	85×—	36										
P60	130×120	18	86.9									

遺構番号	規 模 (cm)	深 さ (cm)	出 土 遺 物			金 屬 品 (個)	そ の 他 遺 物 (個)	備 考
			土面透 (cm)	内耳端 (cm)	輪 入 陶 瓦 (片)			
P61	120×88	42	30.2	13.1	19.0			
P62	84×70	33						
P63	78×78	38						
P64	67×53	24						
P65	90×72	34						
P66	85×54	20	61.0					
P67	42×36	18						
P68	121×80	49	40.0	11.5				
P69	120×38	65	15.5					
P70	105×93	35	55.5					
P71	84×72	4						
P72	71×60	23						
P73	85×80	34						
P74	102×74	53						
P75	106×80	40	120.2					
P76	98×84	37						
P77	64×62	31	5.0					
P78	112×100	53	63.5	1				
P79	80×68	47	2.9					
P80	144×115	64	180.2					
P81	100×95	41						
P82	103×94	9						
P83	107×102	53						
P84	90×88	29	156.8					
P85	110×110	79	16.8					
P86	100×80	47	5.0					
P87	110×90	22	11.3					
P88	155×113	48	9.9					
P89	106×83	47						
P90	106×84	51	32.0					

土面に礫石状石有。

鉄钉1

鉄钉1

白磁碗1

火打ち金具1

鉄钉1

P78を切る。

P77・79に切られる。

P78を切る。

P203を切る。

底面二段となる。

P203を切る。

P201に切られる。底面二段と

P202に切られる。

P157に切られる。

P168に切られる。

P100・188に切られる。

4.4

P65との新旧関係不明。P65と
同一か?

遺跡番号	規 模	深 さ	出 土			土 磁	遠 送	物 品	金 属 器	そ の 他	備 考
			土器器 (cm)	内耳鍋 (cm)	輪 入 陶 磁 (件)						
P 91	78×76	42	9.0	1							
P 92	93×88	33	20.0								
P 93	102×92	31									
P 94	112×72	21	64.0								
P 95	70×68	41									
P 96	85×63	44	10.5								
P 97	96×66	37									
P 98	44×41	16									
P 99	166×148	76									
P 100	93×—	35									
P 101	112×102	47									
P 102	86×80	34									
P 103	80×71	49									
P 104	58×60	62	75.0								
P 105	49×42	15	13.0								
P 106	171×134	23	69.8								
P 107	70×59	40	40.0								
P 108	39×37	29	5.5								
P 109	47×53	14									
P 110	131×80	47									
P 111	144×100	90	606.4								
P 112	170×95	40	22.3								
P 113	190×140	23									
P 114	70×67	29									
P 115	73×53	21									
P 116	80×75	51									
P 117	53×42	33									
P 118	54×48	20									
P 119	65×59	20									
P 120	121×95	52	15.5								

前面一枚。

遺構番号	規 模 (cm)	深 さ (cm)	出 入 陶 磁 (片)			國 調 陶 磁 (片)		石 墓 品 (個)	金 属 品 (個)	そ の 他 物 (個)	備 考
			土器器 (个)	内耳器 (个)	輪 (个)	青磁碗 (个)	白 磁・青白磁 (片)				
P 121	154×30	32	28.5								1.6 表面二枚。
P 122	101×77	39	60.0	9.4							P 125 に切られる。
P 123	91×62	63									
P 124	52×45	18									P 123 を切る。
P 125	256×152	32	19.9								
P 126	117×102	25									
P 127	60×51	20									
P 128	40×32	14									
P 129	45×40	17									
P 130	95×88	25									
P 131	35×30	16									
P 132	40×38	8									
P 133	39×39	15									
P 134	65×54	22									
P 135	20×20	11									
P 136	67×46	17									
P 137	65×64	21									
P 138	48×46	13									
P 139	67×50	10									
P 140	54×48	14									
P 141	48×46	13									
P 142	85×73	38									
P 143	61×56	12									
P 144	34×26	20									
P 145	90×—	30									
P 146	103×68	47									
P 147	90×55	4									
P 148	100×96	22									
P 149	69×64	28									
P 150	65×56	25									
P 151	55×55	15									
P 152	90×70	13									
		16									

遺物番号	規 格 (cm)	深 さ (cm)	出 土 地 点			石 製 品 (石)	金 屬 品 (金)	セ の 他 (e)	備 考
			土器部	内耳輪 (e)	輪入陶磁 (e)				
P 153	88×70	33	1.5						P 152 との新旧関係不明。
P 154	90×50	27							
P 155	57×54	42	4.6						
P 156	100×72	43	44.2						
P 157	120×110	58	15.0						
P 158	81×69	46							P 85を切る。
P 159	51×51	28							
P 160	50×46	25							
P 161	83×56	31	18.0						
P 162	73×70	45							
P 163	36×24	16	49.7						
P 164	134×80	46	31.6						
P 165	50×50	30	40.0						
P 166	88×47	31	55.0						
P 167	27×24	11							
P 168	63×60	19	40.4						
P 169	68×54	40	15.0						
P 170	50×44	30							
P 171	44×42	18	20.0						
P 172	66×60	21							
P 173	69×61	26							
P 174	83×63	31							
P 175	81×64	29							
P 176	62×54	26							
P 177	73×70	30							
P 178	86×76	26							
P 179	60×58	18	70.0						
P 180	146×105	25	55.5						
P 181	135×98	38	173.3						
P 182	103×82	39	85.0						
P 183	85×83	28							
P 184	84×66	15							
P 185	79×71	38							
P 186	50×42	17							

遺構番号	規 模 (cm)	深 さ (cm)	出 土 遺 物			金 属 品 (M)	そ の 他 (S)	備 考
			土器陶器 (T)	内耳輪 (E)	輪入陶器 (W)			
P 187	40×40	19						P 86・87を切る。
P 188	80×70	38						P 54に切られる。
P 189	56×54	28						P 54・55を切る。
P 190	63×57	29						
P 191	120×116	17						礫石状石有。
P 192	39×38	22						
P 193	52×47	22						
P 194	70×65	2						
P 195	54×46	16						
P 196	64×48	12						
P 197	102×102	27	35.0					
P 198	38×34	37						
P 199	54×42	12						
P 200	56×51	16						
P 201	93×71	28						
P 202	32×29	8						
P 203	120×90	34						
P 204	40×40	18						
溝 1	350×60	36	305	1				P 36を切る。P 39との新旧関係不明。
溝 2	230×76	28	200	1				P 39に切られる。P 31を切る。 ビットが通らなかったものと思われる。
溝 3	200×70	25	88.3	13.9				P 203を切る。
溝 4	120×80	18						P 86・85との新旧関係不明。

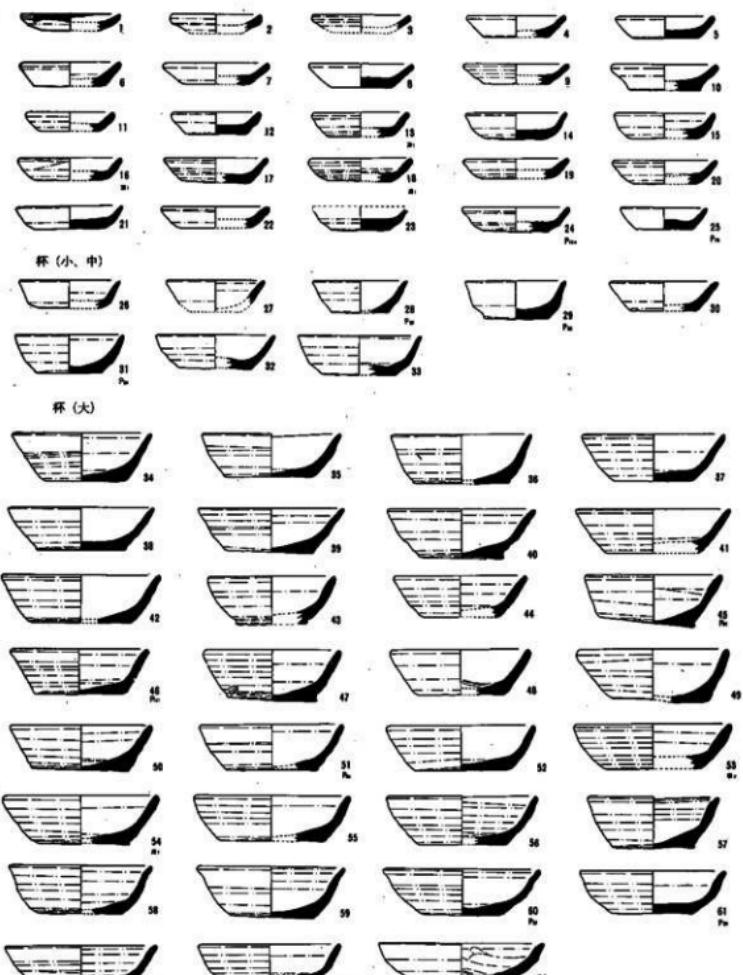


図28 中世土器実測図 (1:4)

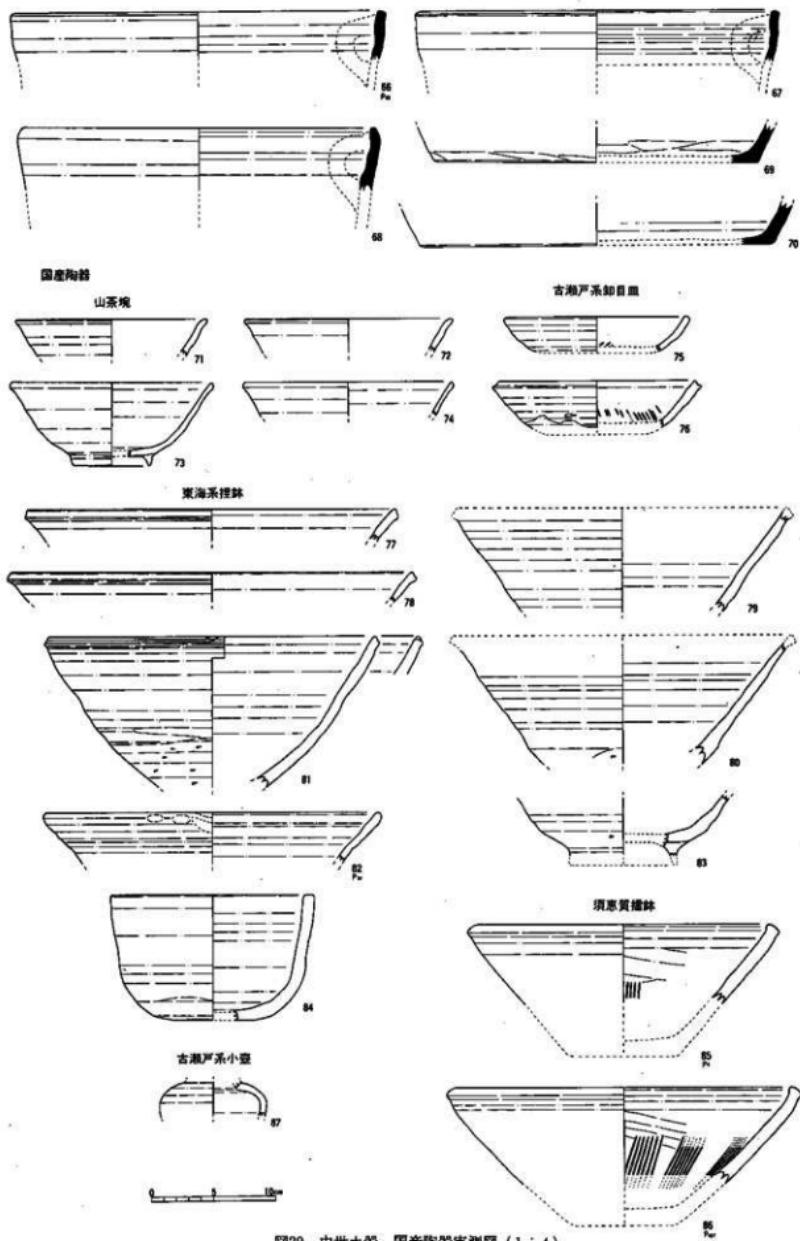


図29 中世土器、国産陶器実測図 (1 : 4)

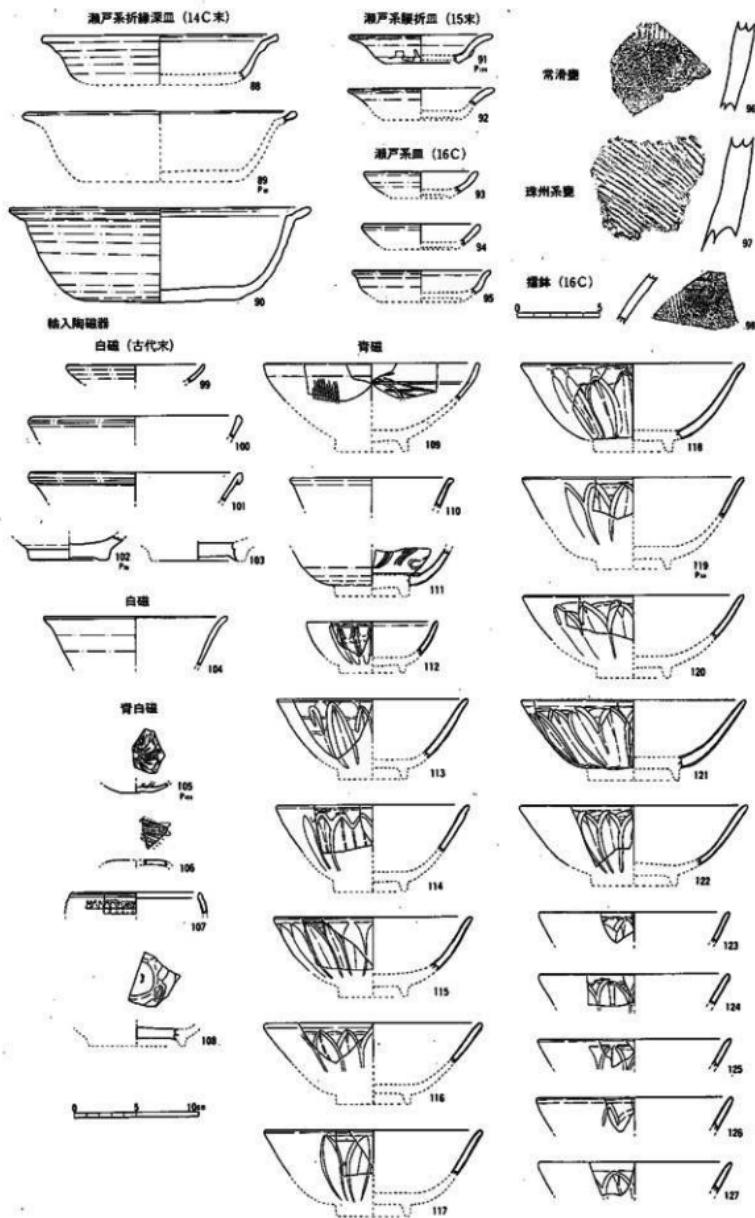


図30 中世国産陶器、輸入陶磁実測図 (1:4)

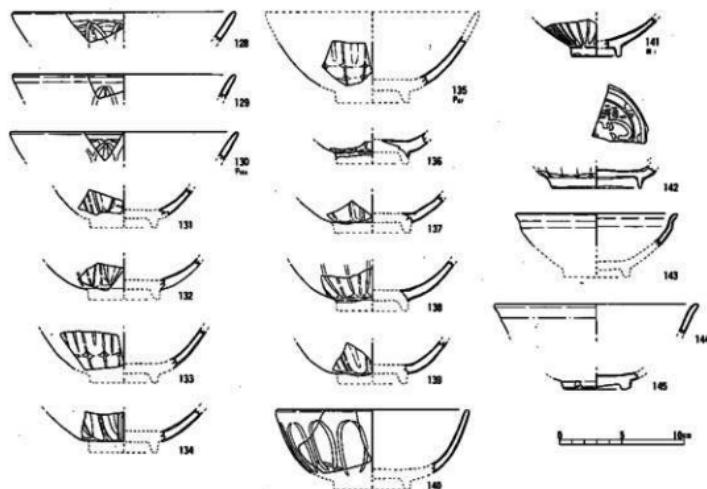


図31 中世輸入陶磁器実測図 (1:4)

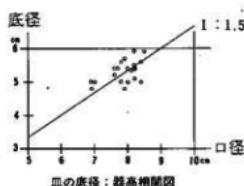
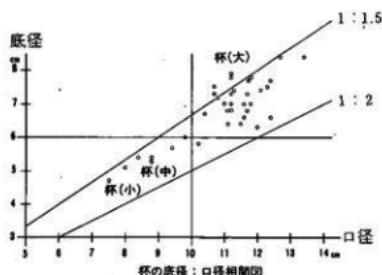
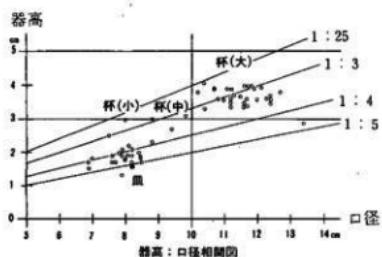


図32 古町遺跡出土中世土師器高、口径、底径相関図

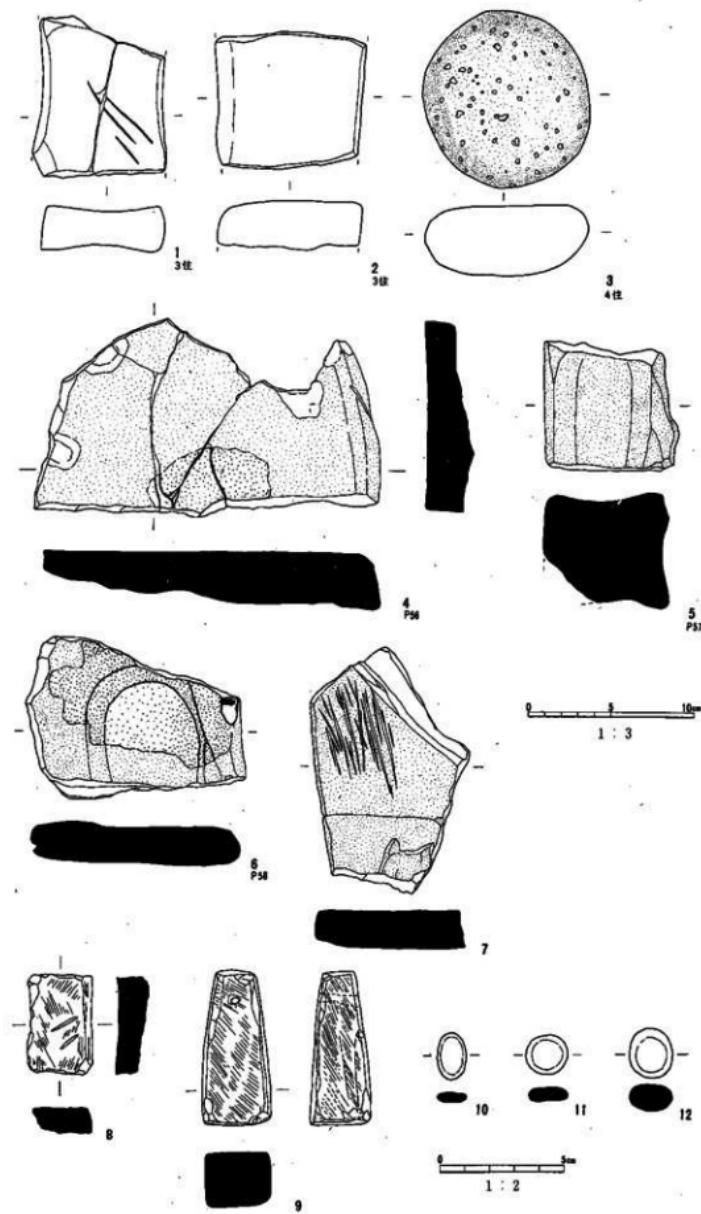


図33 砥石(1~9)、研磨礫(10~11)、磨石(3)(1~7, 1:3, 8~12, 1:2)

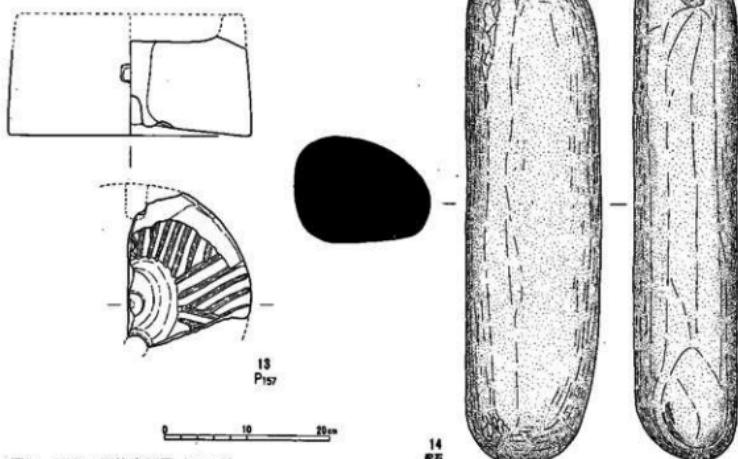


図34 石臼、石柱実測図 (1:6)

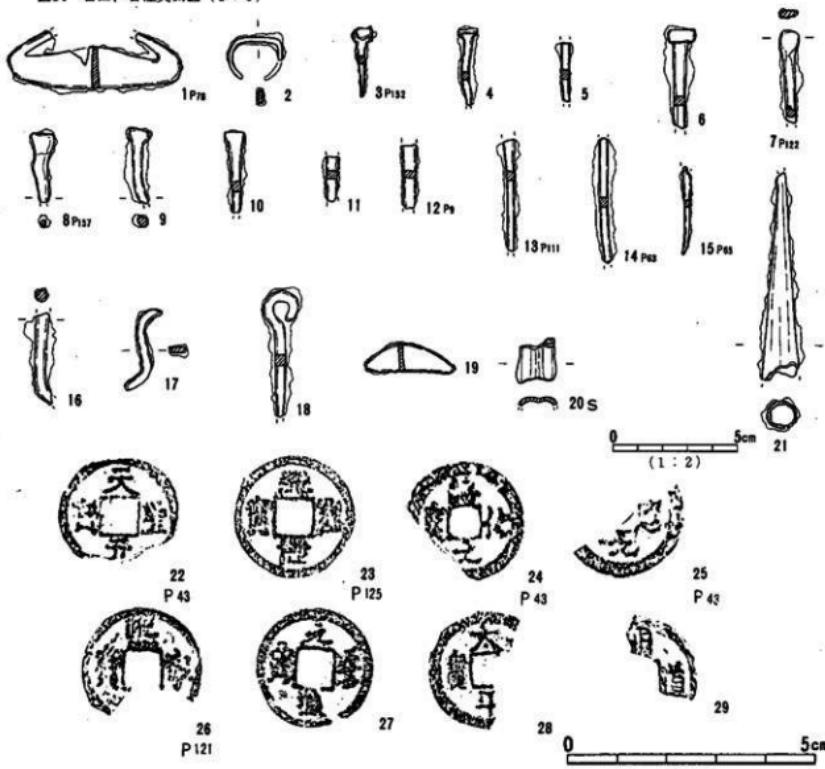


図35 鉄、青銅製品 (1~21・1:2) 銭 (22~29・1:1) (Sは青銅製品) (1:1)



図36 建物跡群(ビ・トゴ)の建物想定図

第3節 まとめ

今回の調査においては、平安時代後半～中世の住居跡が6軒、古代末～中世にかけての建物跡群の柱穴を中心としたピット群204基・溝跡4基、鍛冶関係の炉と思われる土坑、配石等が検出された。ここでは中世を中心に簡単にふれてみたい。

1. 建物跡の配置

ピットは204基検出されているが、そのうちの一部を除くとほとんど溝跡は、建物に関係した柱穴と思われ、確定とまではいかないが、ピットの位置、出土遺物等から図36のごとく約10棟程度の建物跡配置が想定されるが、調査区外にも柱穴が続くものと考えられること、柱穴の配置がこの他にも柱として結ぶるものがあること等から、基本的にはこの様な配置と思われるが、この想定より建物が大きくなる可能性、この他にも建物の棟数がふえる可能性を持つ。この中で、7～10号の想定建物跡は、ピット上部及び、内部から内耳鍋片が出土しているものがあること、遺物のグリットごとの出土状態でも内耳鍋片が比較的多く出土している部分にあること等から、15世紀後半～16世紀の建物跡と思われる。この他の建物跡についての年代は、出土遺物の中心となっている13世紀後半～14世紀代のものと考えられる。また、11世紀末～12世紀前半の遺物が見られることからこの時期の建物がある可能性も考えられる。いずれにしても大規模な建物跡が重複していることは確実と思われる。

2. 市内出土の古代～中世初期の輸入陶磁器（白磁を中心として）

今回の調査では、横田・森田分類による白磁II類、IV類に相当するものが5点出土している。出土状態は、包含層・グリットからの出土がほとんどで、その他の土器、陶磁器との構成ははっきりとしない。大町市内でこのような輸入陶磁器を構造より出土している遺跡は、来見原遺跡と五十畳遺跡の2遺跡がある。最も古いのは、五十畳遺跡、77号住居跡から出土した、いわゆる「西寺タイプ」と呼ばれる白磁碗で、共伴する土器等は灰釉陶器が東濃大原2号窯式であること等から10世紀前半と思われる。この他はIV類が共伴するもので、五十畳遺跡72号住居跡、来見原遺跡5号住居跡で、丸石2号窯式ないしは大原10号窯式併行の灰釉陶器が出土しており、11世紀後半～12世紀初頭と思われる。このことから古町遺跡出土の白磁II・IV類は、最近の周辺地域の状況等から見て、山茶碗で初期のもの（図29、71・72）と共に伴っていたと考えられ、11世紀末～12世紀初頭のものであろう。

3. 中世土師器について

今回の調査で多量に出土した土師器の年代は明らかにはできないが、出土した陶磁器が、13世紀後半～14世紀代のものを中心としていることから、それが中心となり、11世紀末～12世紀初頭、15世紀後半～16世紀のものも少なからず混じっているものと思われる。器種としては、杯・皿で、杯は大きさに応じて小・中・大に分けられるが、小と中の差はあまりはっきりとしない。成形はロクロ成形で、底部は回転糸切りであり、手づくりのものはない。市内において出土している例で良好なものとしては、山寺廬寺跡乙地点と中条原遺跡7号土坑出土一括資料がある。山寺廬寺では、古瀬戸の瓶子・四耳壺中から皿が出土しており、青白磁水注が並んで出土している。このことから13世紀代とされる。中條原遺跡7号土坑からは、皿・

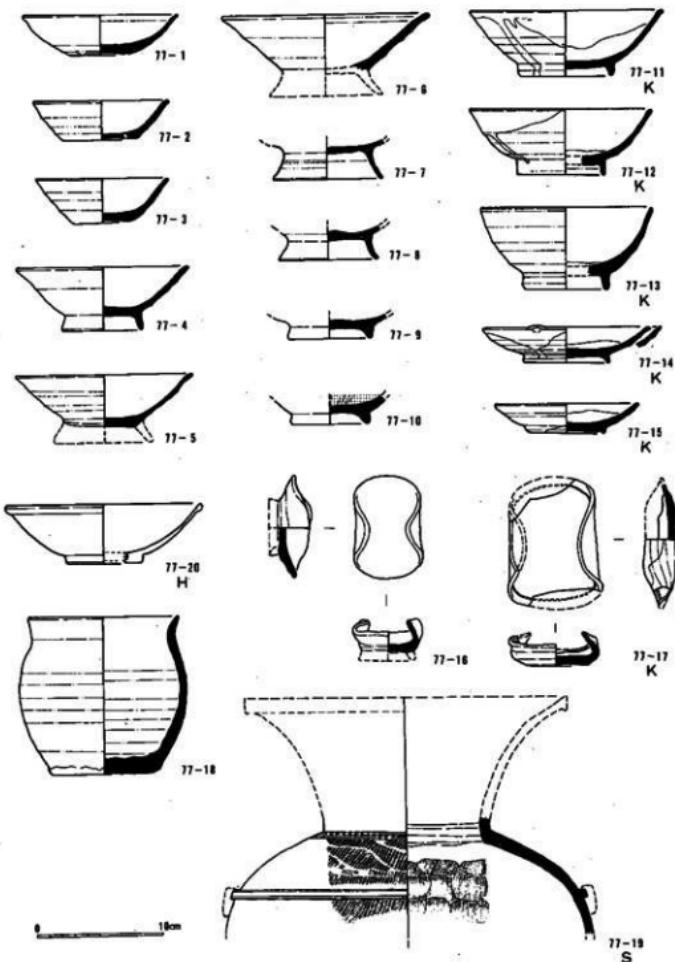


図37 五十畠道跡77号住居跡出土土器陶磁器（Sは須恵器、Kは灰釉陶器、Hは白磁）

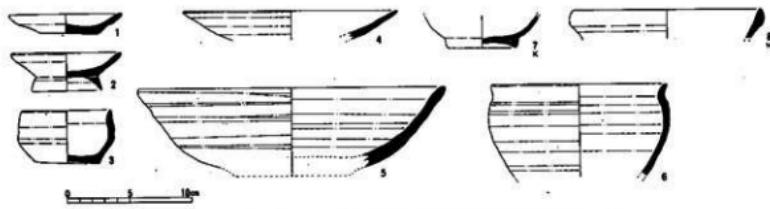


図38 未見原5号住居跡出土土器、陶磁器（Kは灰釉陶器、Hは白磁）（1：4）

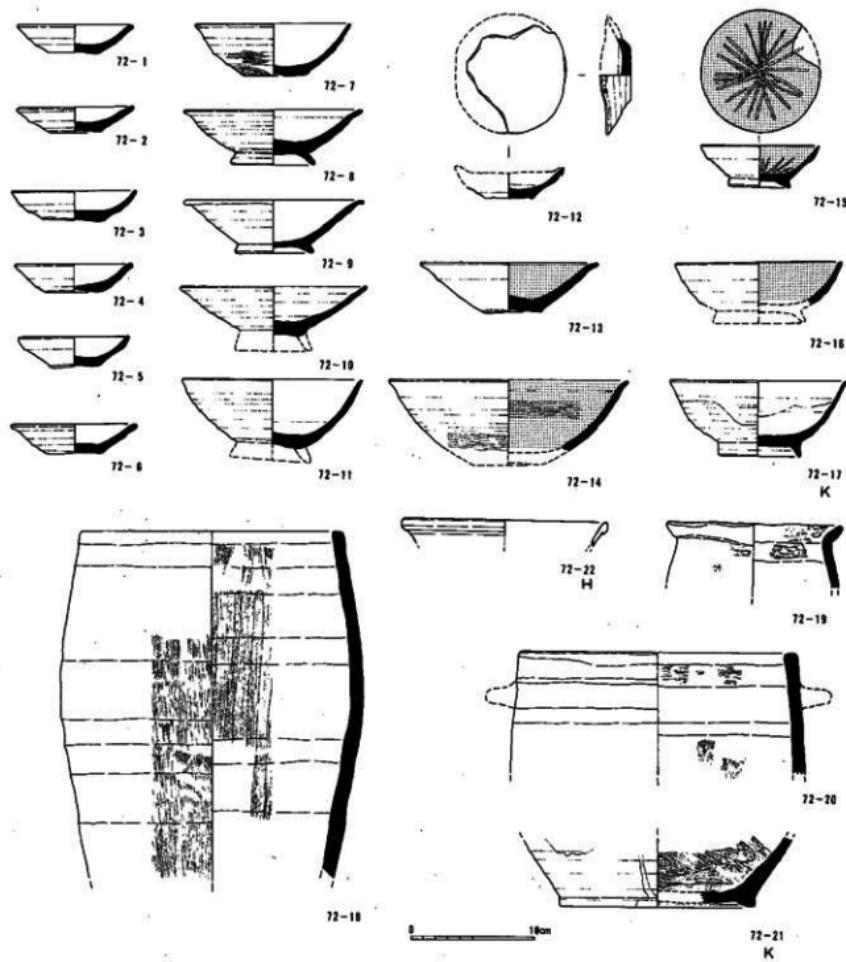


図39 五十畳遺跡72号住居跡出土土器、陶磁器 (Kは灰釉陶器・Hは白磁)

杯が出土しており、龍泉窯系青磁碗が共伴している。このことから13世紀末～14世紀代と考えられる。口径と器高の比率をくらべてみると古町遺跡出土の土師器は、中城原遺跡のものに近いが、山寺廃寺に近い皿もある。このことから、当方では13世紀より、ロクロ成形土師器が使用されていた可能性が高く、非ロクロが主流である松本・諏訪地方とは異なる特異な地域であったと考えられる。

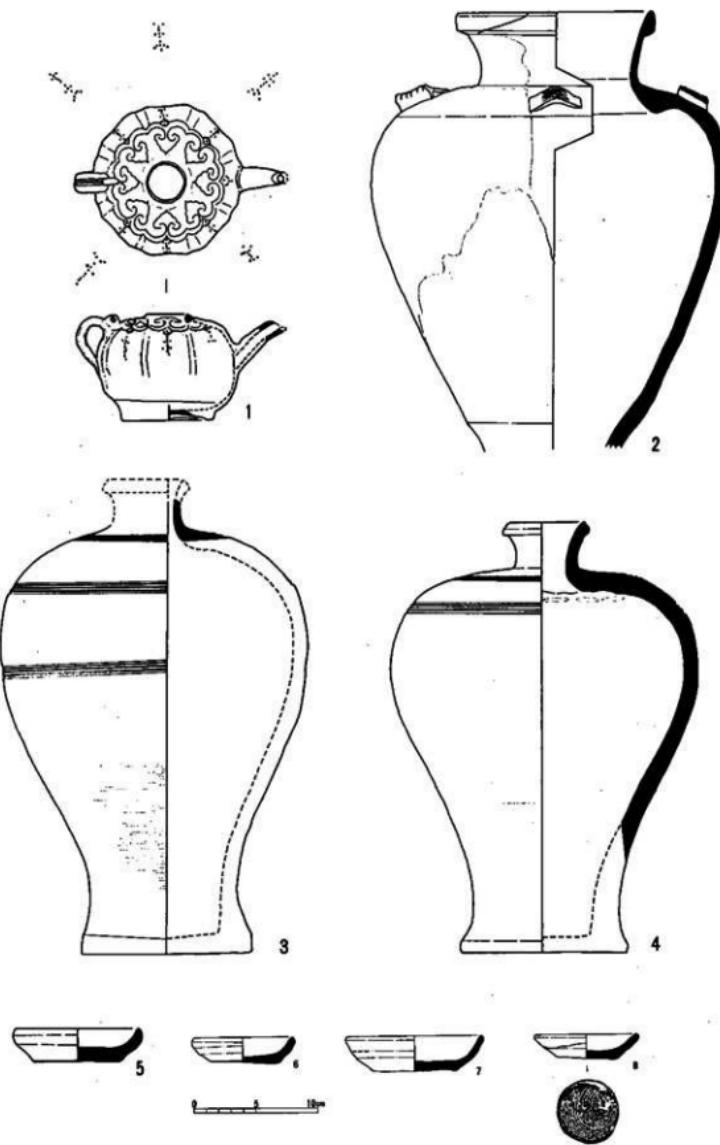


図40 間田山寺焼寺乙地区出土遺物（1. 青白磁・2～4. 古窯戸・5～7. 土器器・8. 東海系陶器皿、
5・6は2内出土・7は3内出土）（1～5. 1:3、6～8. 1:4）

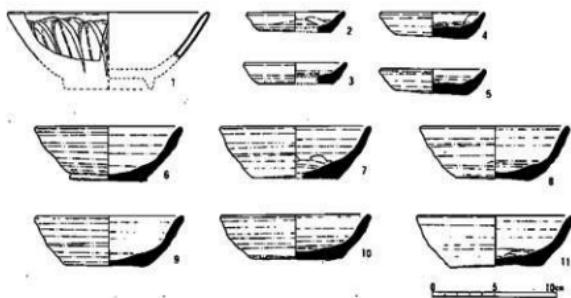


図41 館ノ内中城原遺跡道端地籍7号土壠出土中世一括遺物（1は抱泉窯系青磁・他は土器類）

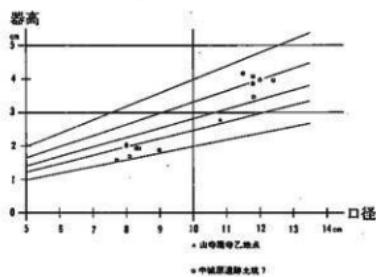


図42 山寺廃寺、中城原遺跡出土中世土師器・器高：口径相関図

第IV章 結語

古町遺跡として発掘調査された一連の地域は、大町市社館之内集落の周辺部であるが、同時に古代から中世にかけて、安曇一円を切り開き支配し続けた開発地主—武士—仁科氏の、初期の居館跡の周辺部でもある。居館跡と推定される区域は、現在の集落の中心部のある、小高い部分であり、10世紀から11世紀にかけての豊穴住居址や、壠立柱建物が数棟検出されたところは、居館の堀の外あるいは土居外に当る。この位置関係は、ここに住んだ人たちの身分や境遇などを、暗示するものとみてよいであろう。

仁科氏がここに居館を構えた時期を、直接実証するような史料は未だ見出されていないが、仁科御厨の設置その他に関連づけて、推定することは可能である。

仁科御厨は、鎌倉時代はじめの建久3年(1193)に成立した「皇太神建久已下古文書」に「件御厨、往古建立也」とあり、12世紀末の時点で、神宮の御前でさえもすでにはっきりした建立年代がわからなくなっていたことが知られる。一志茂樹は他の御厨の史料と照合して、「往古」を建久3年より110年か120年前のことと推定する。(仁科神明宮その歴史と式年造営)つまり11世紀後葉である。ちなみに八坂村藤尾の覚音寺本尊千手観音像の胎内板札は、治承3年(1179)のものであるが、ここに仁科御厨とあり、当時すでに御厨の領域が東方の山間部にまでも広がっていたことを物語る。

仁科氏が御厨の司になったのは、御厨が成立した後に、どこからか赴任してきたというものではなく、その時点にはすでに社地域の開拓地主として根をおろしていたのを、そのまま登用したと見るべきであり、したがってここに居館を構えたのは、御厨創設の11世紀後葉よりもかなり早い時代と考えたい。そして今回居館跡の北西のところで検出された、3号と7号住居址の年代10世紀代を、仁科氏居館構築の年代とみたい。

そして居館の周辺にある、これらの豊穴住居址や建物址を、それぞれ年代に差異はあるにしても、いずれも仁科氏の被官あるいは従属農民の住家と解したいのである。それにしても3号住居址の特異な家づくりは興味をひくところである。

園場整備の事前調査がたび重なるうちに、それまでほとんど手の及ばなかった中世の土豪や農民たちの生活実態を、少しずつ解明する手がかりができるたのは、有難いことである。

次つぎと実施しなければならない事前調査にあたり、多くの悪条件のもとでよく対応して下さる大町市教育委員会、殊には埋蔵文化財係職員諸氏の御労苦、さらに調査に参加して下さった市民有志の皆さんに對し、深い敬意と感謝を捧げるものである。

(団長・藤崎健一郎)

1. 遠 景

(北東より・調査前)



2. 近 景

(東より・調査前)



3. 近 景

(南東より・調査中)



1. 遠 景
(東より・調査中)



2. 全 景
(上空より) (右上は
船ノ内居前路一ノ
郭、中央右端三ノ
郭)



全 景
(東側上空±9)



A区全景
(X轴东側上空上り)



1. 3号住居跡
礫・遺物(南より)
出土状況

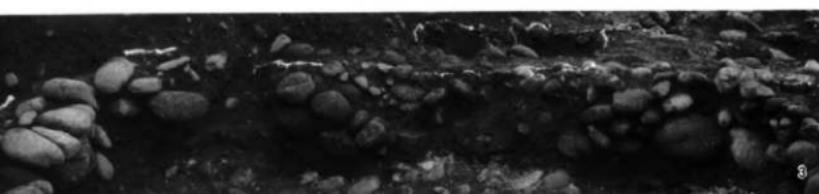


2. 3号住居跡
礫・遺物出土状況
(東より)



3. 3号住居跡
東壁石積み



- 
1. 3号住居跡
礫・遺物出土状況
(北より)
- 
2. 3号住居跡
礫・遺物出土状況
(西より)
- 
3. 3号住居跡
西壁石積み

1. 3号住居跡
全景(南より)



2. 3号住居跡
全景(東より)



3. 3号住居跡
北壁石積み



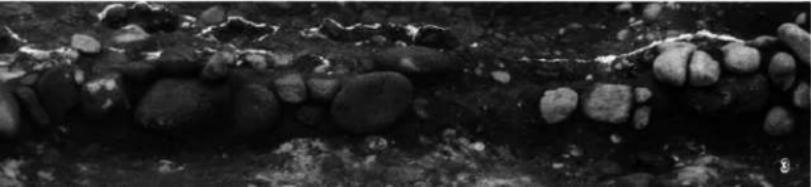
写 真 8



1. 3号住居跡
全景 (北より)



2. 3号住居跡
全景 (西より)



3. 3号住居跡
南壁石積み

1. 3号住居跡

礫出土状況（南より）



2. 3号住居跡

礫出土状況（東より）

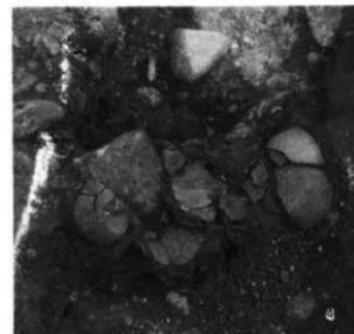


3. 3号住居跡

カマ下周辺 磕・遺物出土状況

4. 3号住居跡

カマ下北東側 土器出土状態





1



2



3



4



5



6



7



8

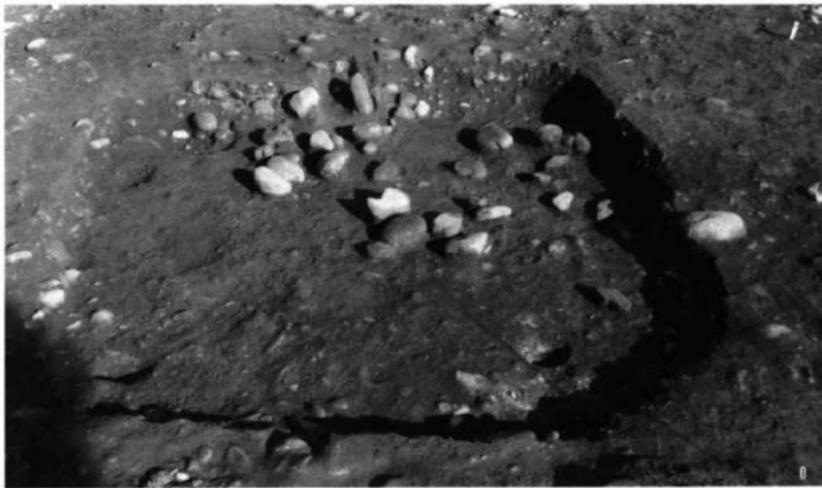
1 ~ 8. 3号住居跡カ
マド
1. 全 景
2. 残存状態

3. 遺物出土状態
4. 正面より

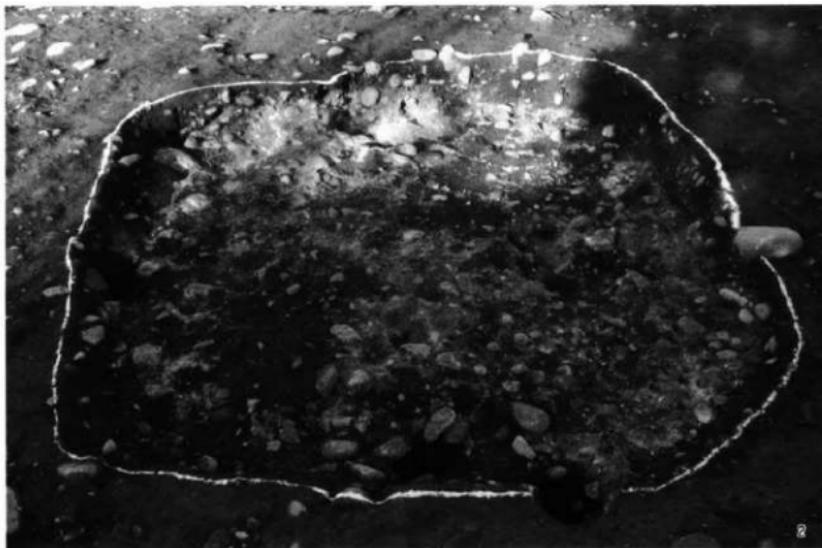
5. 左側より
6. 右側より

7・8 上部石組み除
去後 燃焼部の敷
石及び支脚石（後
方の礫が残した下
の空間が煙道で外
に結がる）

1. 4号住居跡
礫・遺物出土状況
(南より)



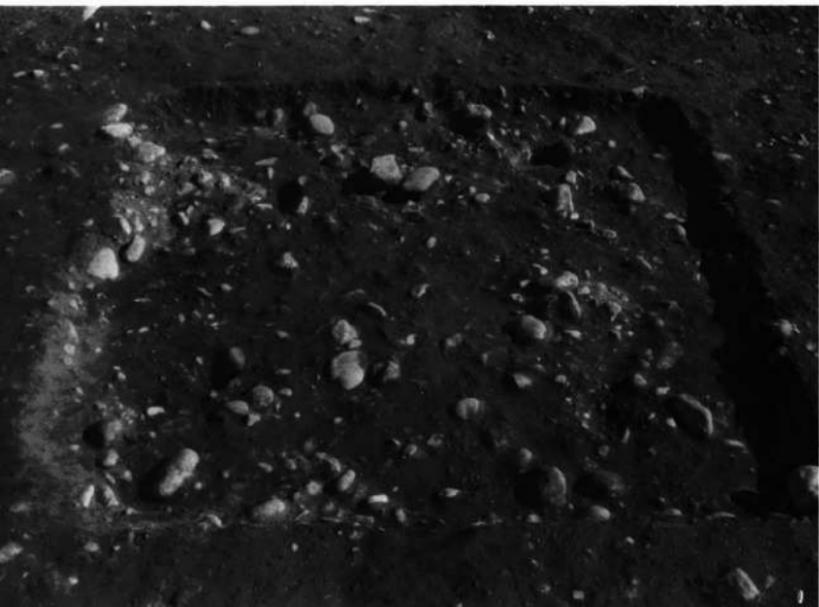
2. 4号住居跡
カマド精査後 全
景(南より)



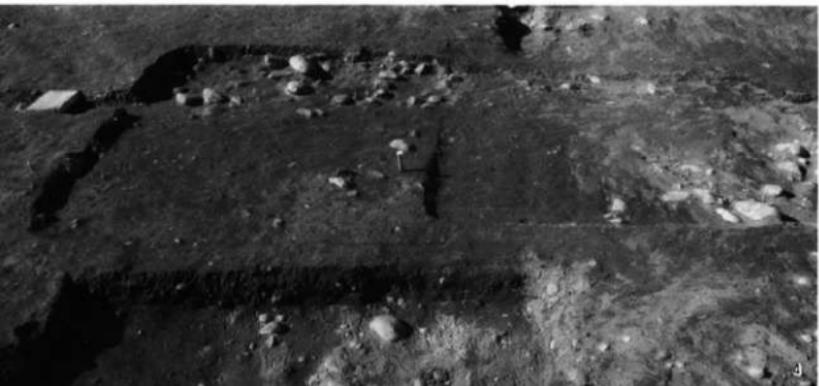
3. 4号住居跡
カマド(正面)
4. 4号住居跡
カマド(左側より)



1. 5号住居跡全景
(西より)



2. 5号住居跡カマド
3. 5号住居跡カマド
内 遺物出土状態

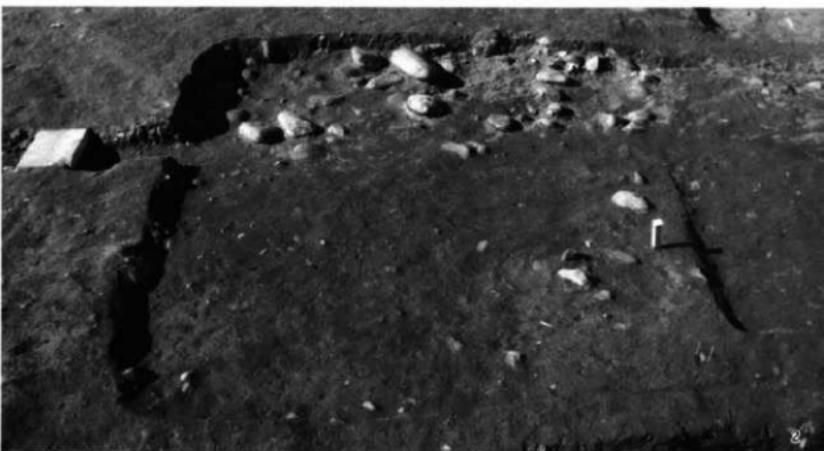


4. 6・7号住居跡
(東より。手前は 8
号住居跡)

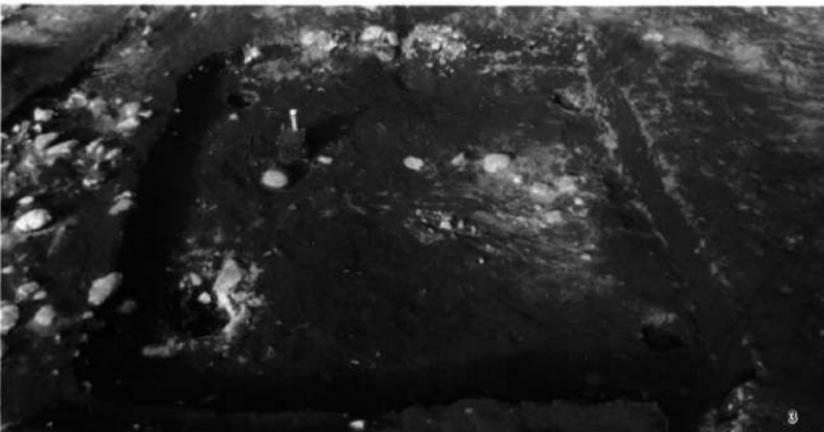
1. 6号住居跡
(西より)



2. 7号住居跡
(東より)



3. 7号住居跡
(南より)





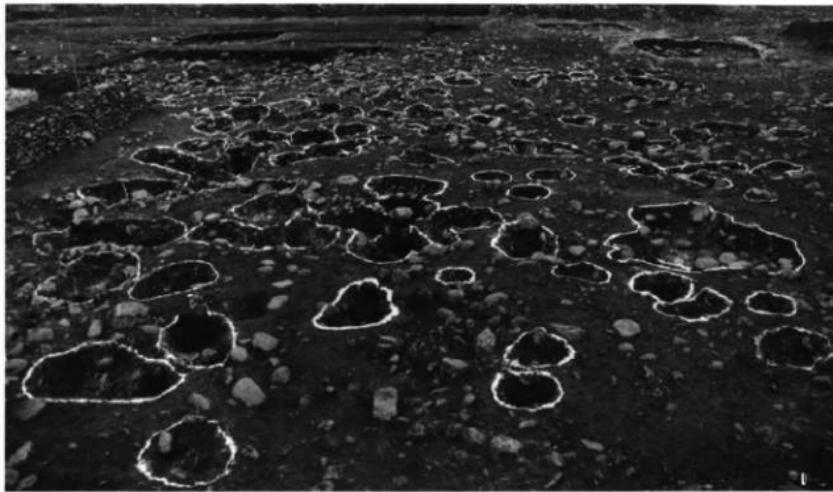
1. 中世建物跡群
(ビット群) 全景
(上空より)



2. 中世建物跡群
(ビット群) 全景
(東より)

1. 建物跡群

(ピット群) 全景
(西より)

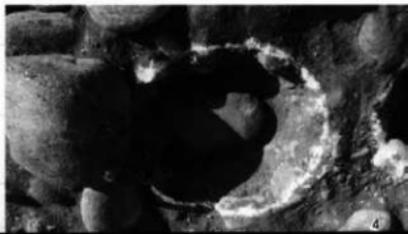


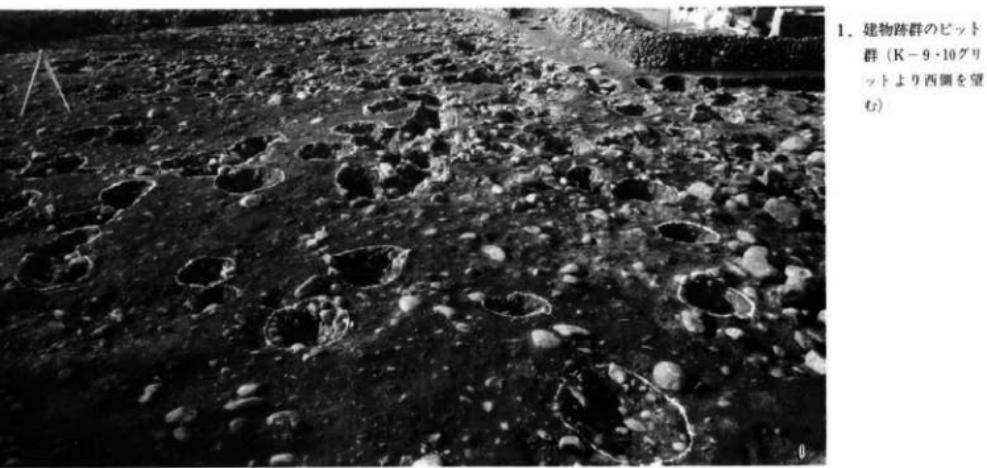
2. 建物跡群のピット

群 (G・H-5 グリ
ットより南側を望
む)

3. P. 5 内甌石
(北より)

4. P. 13 内甌石
(東より)

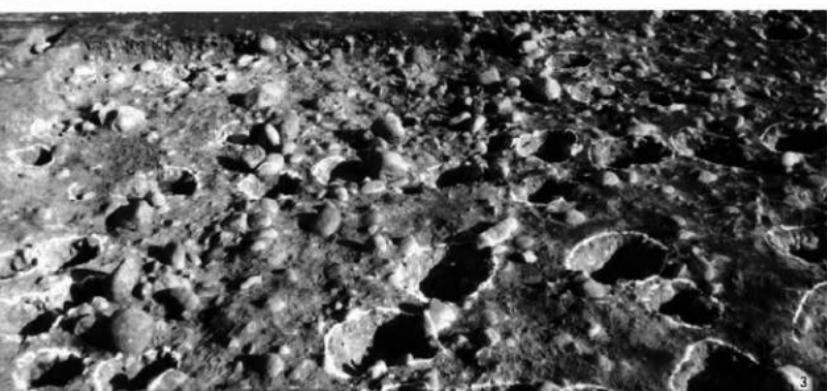




1. 建物跡群のピット群 (K-9・10グリッドより西側を望む)



2. 建物跡群のピット群 (J-6・7グリッドより西側を望む)



3. 建物跡群のピット群 (F-6・7グリッドより東側を望む)

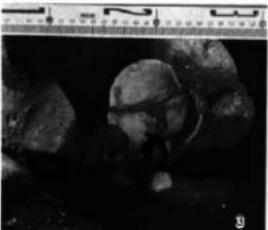
1. 建物跡群のピット
群(F-7グリット
より南東側を望む)



2. 建物跡群のピット
群(F-7グリット
より南側を望む)



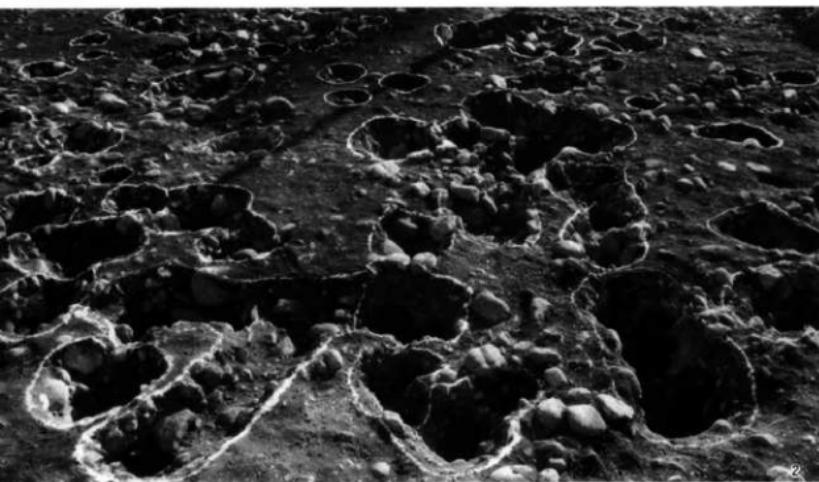
3. P. 33中世土器
出土状態
4. P. 125炭化米塊出
出土状態
5. P. 157石臼出土状
態



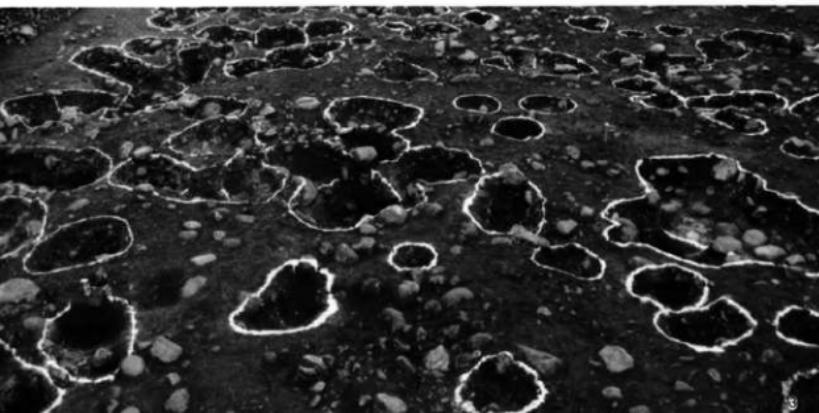
1. 建物跡群のピット群 (E・F-7グリットより南側を望む)



2. 建物跡群のピット群 (D-7グリットより南側を望む)



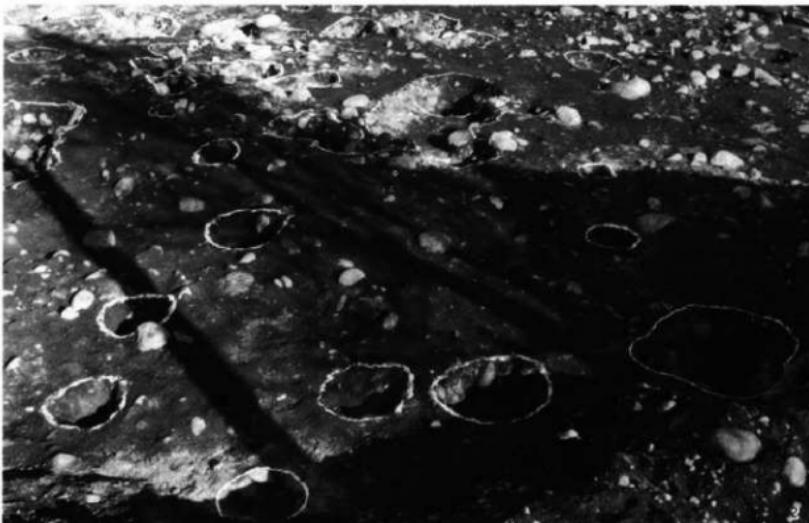
3. 建物跡群のピット群 (A・B-9・10グリットより東側を望む)



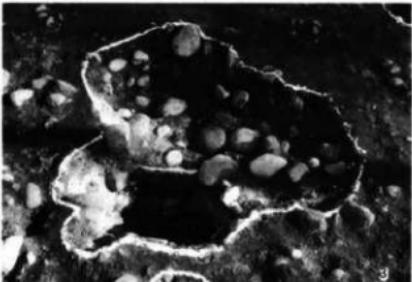
1. 建物跡群のピット
群 (B・C-9・10
グリットより東側
を望む)



2. 建物跡群のピット
群 (B-14グリット
より東側を望む)

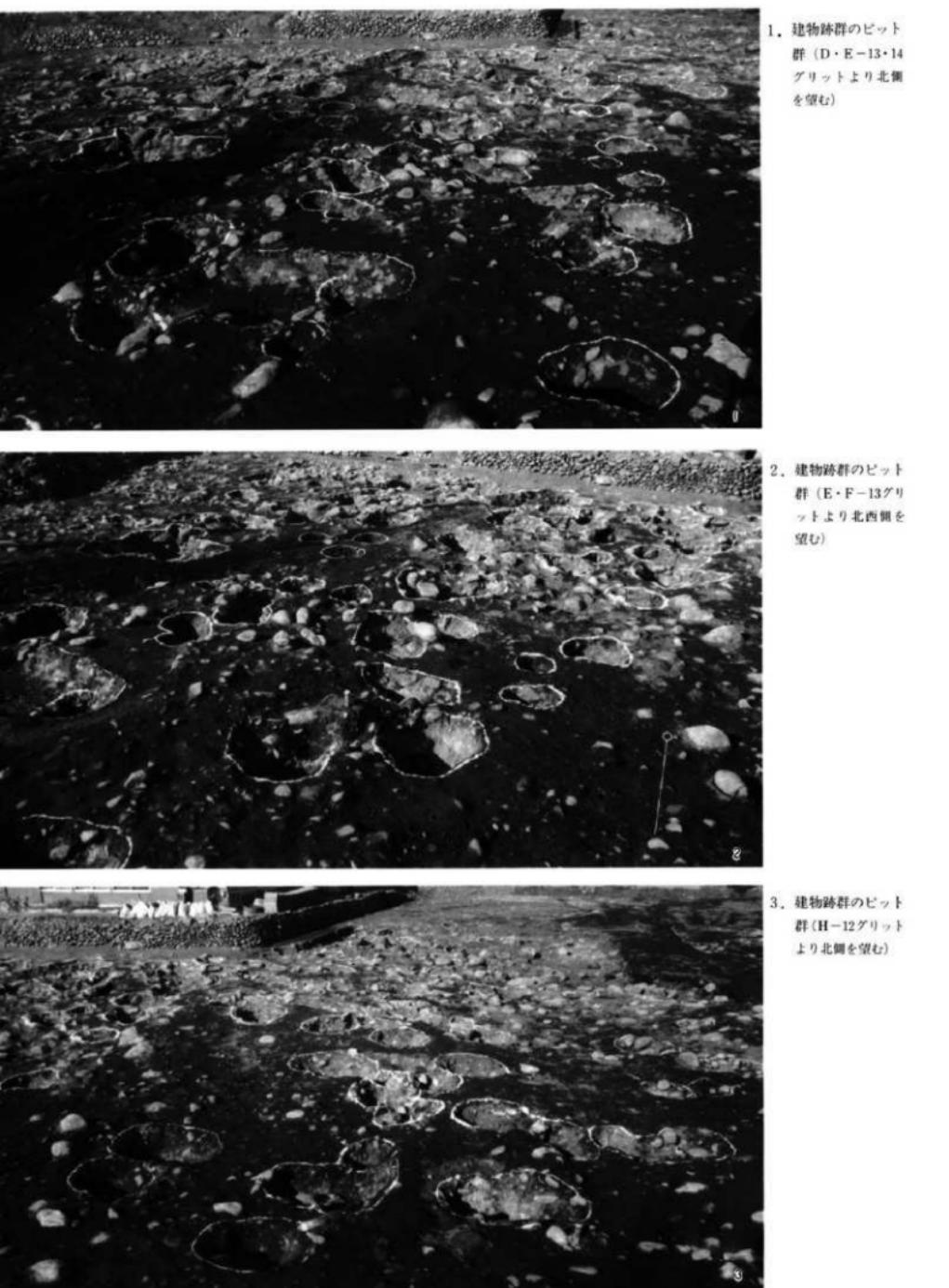


3. P. 111-113(西よ
り)



4. P. 121-125(北よ
り)



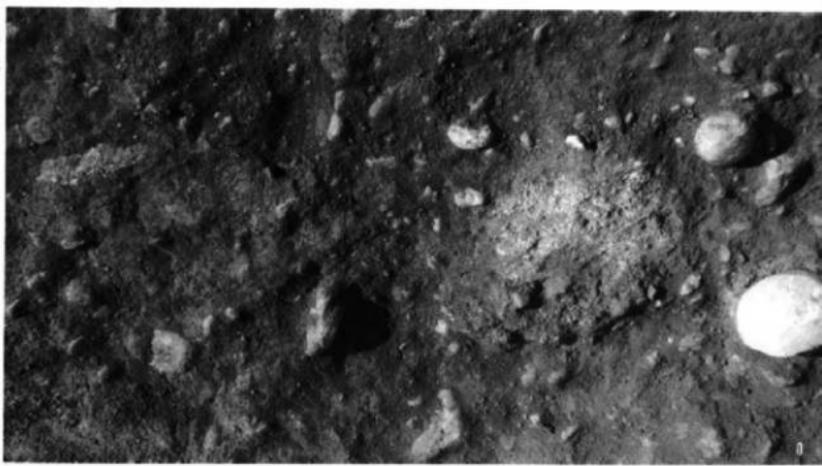


1. 建物跡群のピット群 (D・E-13・14グリットより北側を望む)

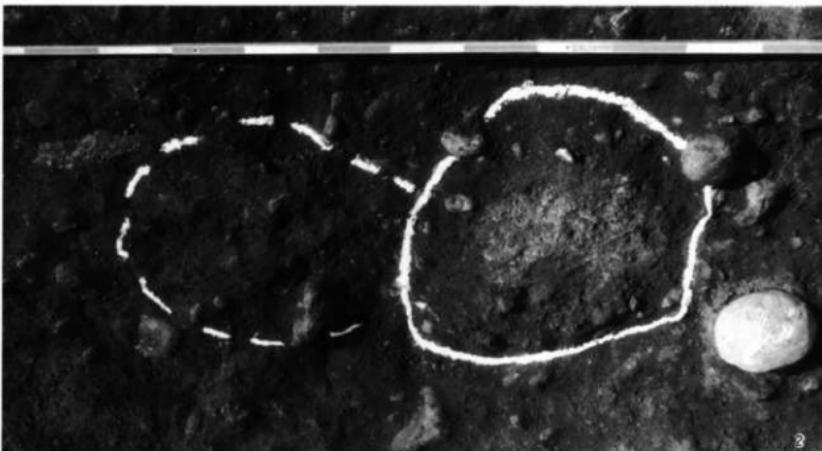
2. 建物跡群のピット群 (E・F-13グリットより北西側を望む)

3. 建物跡群のピット群 (H-12グリットより北側を望む)

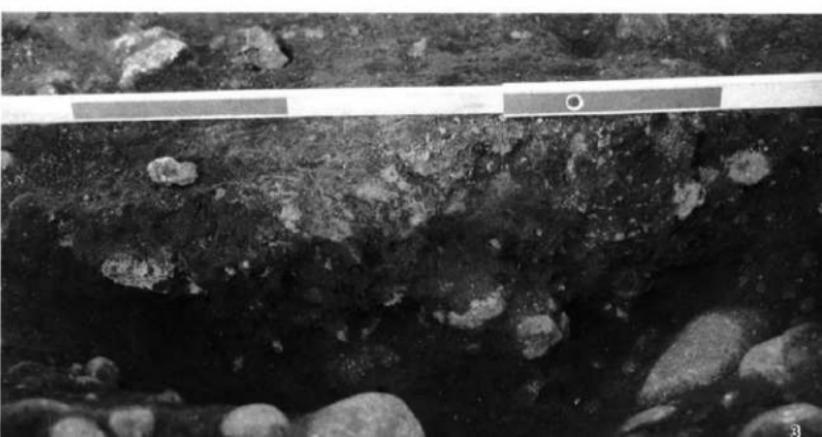
1. P. 197 (鍛冶関係
土坑) 検出状況 (北
より)



2. P. 197 (鍛冶関係
土坑) 検出状況 (円
内が主体部で、破壊
円内には鉄滓・銅滓
が集中。北より)



3. P. 197 (鍛冶関係
土坑) 主体部断面
(南より)





1. P. 197 (鍛冶関係
土坑) 全景(北より)



2. P. 197 (鍛冶関係
土坑) 主体部全景
(東より)



3. P. 197 (鍛冶関係
土坑) 主体部内鐵
滓等出土状況

1～4. 配石

1. (東より)
2. (西より)
3. 石柱出土状態
4. (北より)



5. 居館跡北側外堀確認

認グリット1断面
(北より) (上から
4層目が居館跡時代
の土層。黒色土層
であるが、堀を掘っ
たという感でなく、
自然の地形を利用
した外堀という感
じである)



1. 2号住居跡調査地
遠景(東より)



2. 2号住居跡調査地
近景(西より)(右端奥が1号住
居跡調査地)



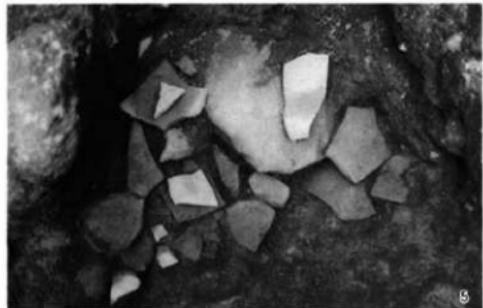
3. 2号住居跡調査地
遠景(北東より 1989年調査地
B区より)



1. 1号住居跡全景
(南より)

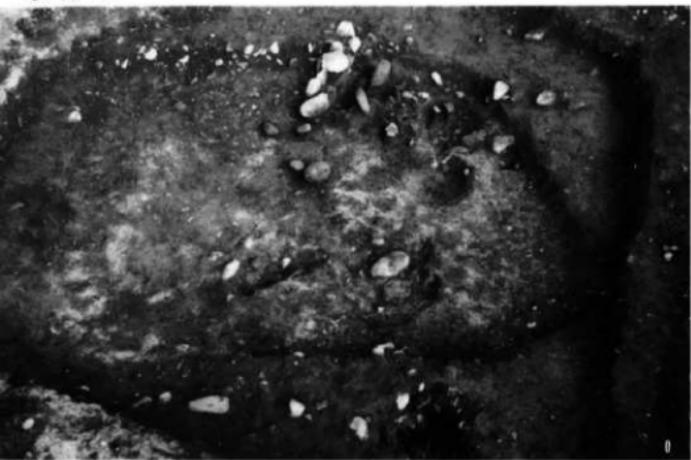


2～4. 1号住居跡カマド

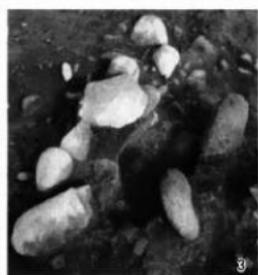


5～7. 1号住居跡遺物出土状態

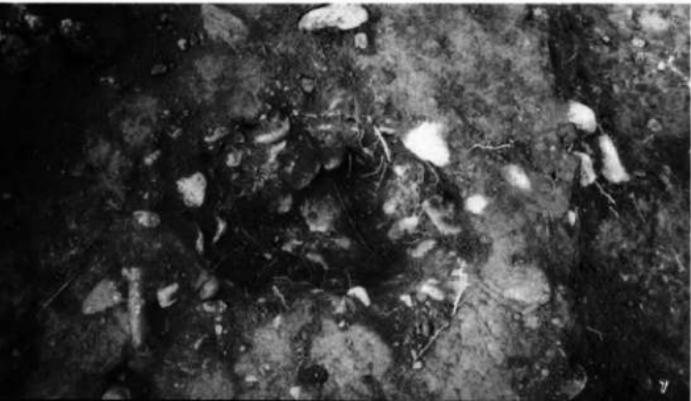
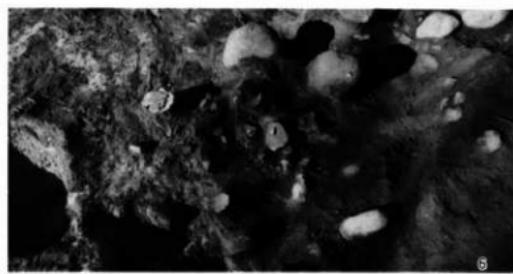




1. 2号住居跡全景(西より)



2～4. 2号住居跡カマド
5～6. 2号住居跡遺物出土状態



7. 2号住居跡西側外のピット(南
より)(内部からは中世土器器
片が出土しているので中世のも
のがと思われる)

平安時代土器
(1-11は1号住
居跡出土)



2



5



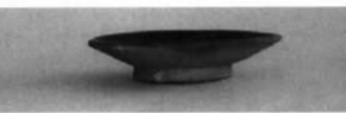
19



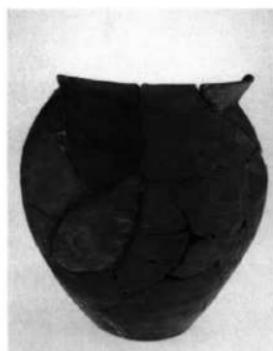
5



12



22



29



30



32



38



42



43



47



54



40



I - 2



I - 22



I - 21



I - 20



25



12



18



59



57



40



49



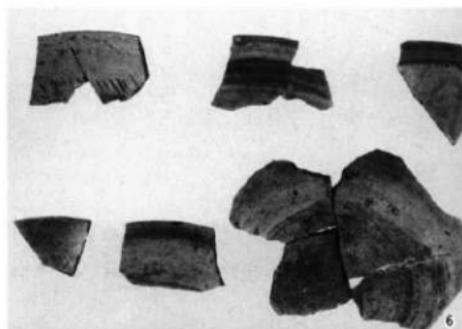
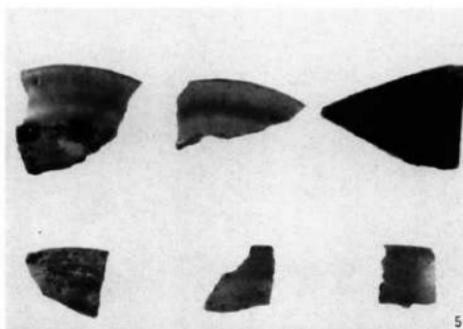
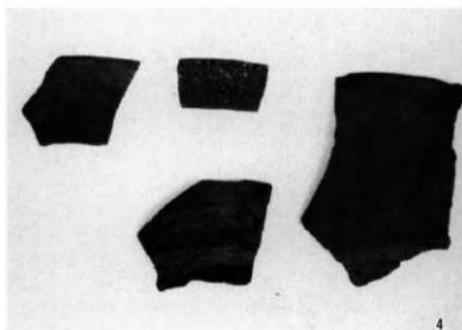
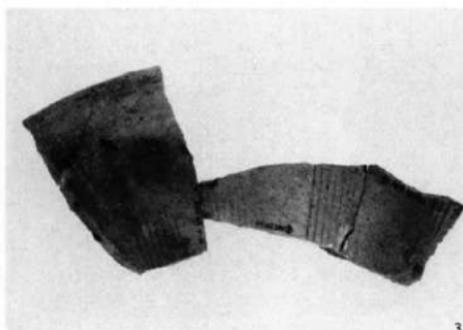
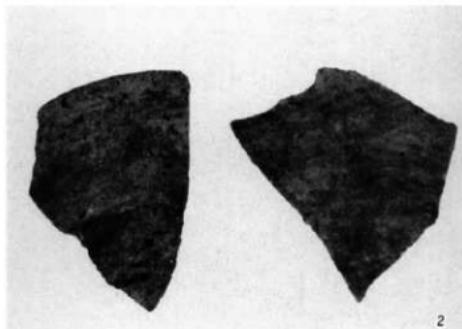
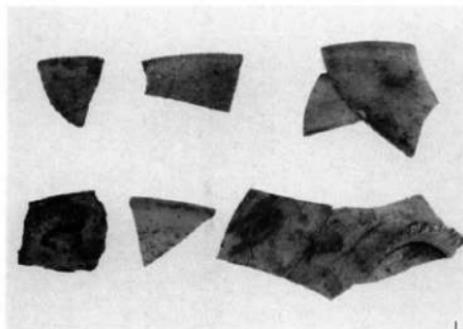
65

平安時代土器
(1号住居跡出土)

中世土器
(土師器・内耳鍋)

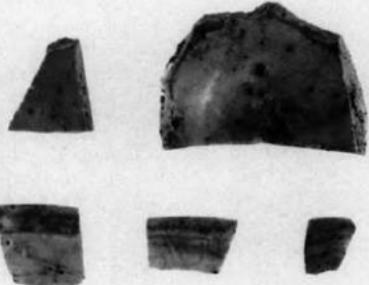
国産陶器

1. 山茶碗
- 2・4. 東海系擂鉢
3. 須恵質擂鉢
5. 麻折皿 (15世紀末)、擂鉢、瀬戸系皿 (16世紀)
6. 諸口目皿 (13世紀後半・14世紀)、折縁深皿 (14世紀末)

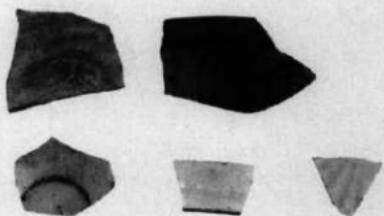


輸入陶磁器

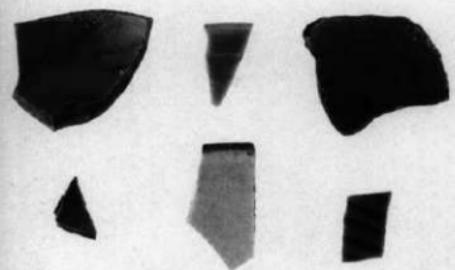
1. 白磁（古代末）碗・皿
2. 青白磁、同安窯系青磁
3. 白磁（中世）、龍泉窯系青磁碗
- 4 ~ 6. 鎌蓮弁文の龍泉窯系青磁



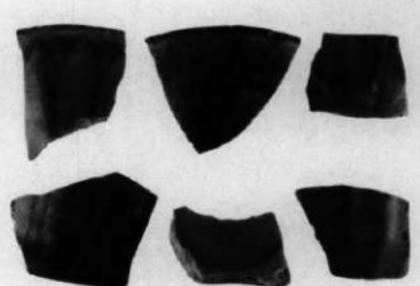
1



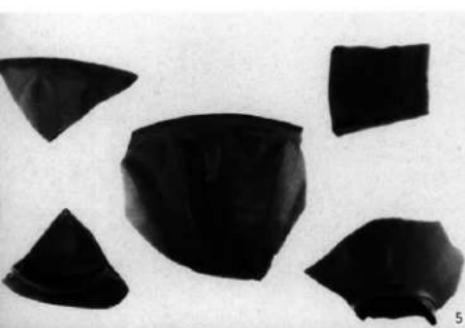
2



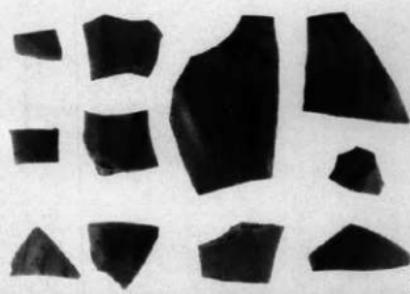
3



4

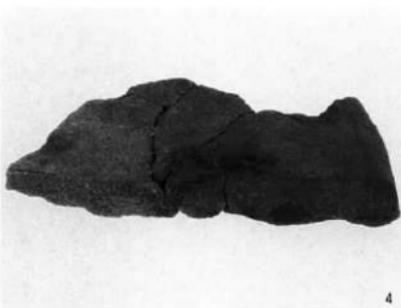


5



6

砥石、研磨櫻
(碁石状石器)



4



6



5



7



9



8



10~12



11

12

鉄製品
青銅製品





1. 重機による表土除
去作業

2. 梢出作業



3・4. 道構検出掘り
下げ作業



5・6. 道構精査、実
測作業



7. 現地説明会

8. ヘリコプターによ
る写真測図

大町市埋蔵文化財調査報告書第18集

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘報告書

古 町

平成3年3月20日印刷

平成3年3月30日発行

発行 長野県大町市大字大町3887
大町市教育委員会

印刷 長野県長野市中越293
ほおづき書籍舗

